

地域における情報教育と生涯学習に関する意識調査

吉田信夫^{*1}・江木鶴子^{*1}・金子真理子^{*2}・千々松 康^{*1}・

中島信恵^{*1}・柊 軍^{*1}・日野綏彦^{*1}・藤井美知子^{*1}・

堀田雅子^{*2}・前出泰司^{*1}・森山博教^{*1}

(^{*1}情報システム学科, ^{*2}保育学科)

An Investigation into the Expectations of Information Technology Education and Life-Long Education in This Area

Nobuo YOSHIDA^{*1}, Tsuruko EGI^{*1}, Mariko KANEKO^{*2},

Yasushi CHIJIMATSU^{*1}, Nobue NAKASHIMA^{*1}, Jun TONG^{*1}, Yasuhiko HINO^{*1},

Michiko FUJII^{*1}, Masako HOTTA^{*2}, Yasuji MAEDE^{*1} and Hironori MORIYAMA^{*1}

(^{*1}Department of Information Systems, ^{*2}Department of Nursery Education)

Abstract—In order to live in modern society, having the ability to collect the information that is required for one's occupation, effective for our life, and to manage it and invent new information, and also to distribute it is greatly needed. Proficiency in languages is especially required to collect and distribute information. The educational institutions that aim at teaching the basic ability mentioned above now should recognize what kind of information study is demanded by their regional communities. These educational institutions are expected to widely open the door not only for students but also for their regional communities.

We, all the staff members, who have been engaged in the teaching field of information processing and language and culture at a junior college for many years, carried out a questionnaire to investigate the demands for information study of our regional communities with a view to examining our role as the educational institution. We report the results of the questionnaire survey mentioned above.

Key Words—information technology, life-long education, local community, modern society

1. はじめに

地域社会で必要とされる情報化人材の人材数と技術水準とを視覚的に表すならば、概ね三角形の構図となる(図1)。短期大学の情報処理教育を専門とする学科は、教育目的がこの三角形の中間層から底辺層を形成する有能な専門技術者を多数育成することであり、地域の高度情報化推進にとって重要な位置を占める。山口県の宇部市と小野田市は、本州の西の外れに位置しているにもかかわらず、この地の主力企業が全国的にも先陣を切ってコンピュータを導入したこともあり、1960年代から情報処理教育勃興に対する機運が高揚した。宇部市には、煤塵の空から青空を取り戻し始めた1965年に、現在の宇部フロンティア大学短期大学部「情

報システム学科」の前身「工業計数科」が宇部短期大学に設立され、情報処理教育が開始された。石炭産業から鋳工業と化学工業へ活路を開き発展を遂げてきた両市をはじめ、周辺の市町村においても、情報処理技術、近年はIT (Information and Communication Technology と捉える) に対する関心は高い。

日本では太平洋戦争終結直後の第1次ベビーブームからおよそ25年後に第2次ベビーブームが記録されたが、それからすでに30年が経過した今、ベビーブームは2次で消滅し、出生数は横ばいから減少の一途をたどっており、18才人口の減少から大学の維持は非常に困難な時代を迎えている。

コンピュータの利用技術教育、プレゼンテーション技術教育、情報リテラシー教育、情報モラル教育など

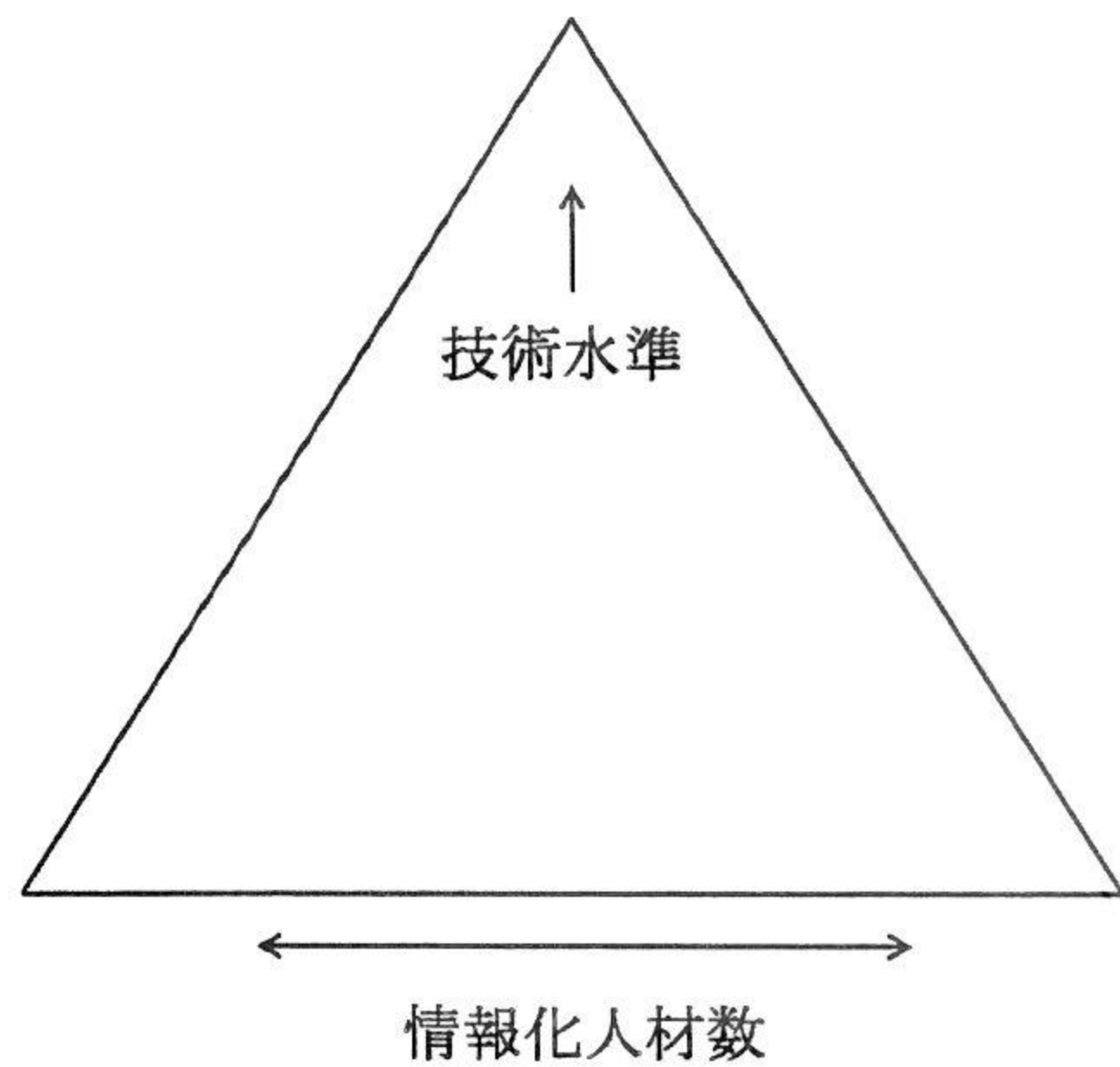


図1 地域社会における情報化人材の構成

が、全ての人に必要な基礎的能力にかかわるものとして、今後は高等学校卒業時までには教育されることになる。しかしこの転換は、現在、またはこれからのことであって、地域社会から要望される情報教育が広く社会に開かれることではない。「誰もがいつでも学ぶことができる場」を地域社会に提供することは、今後の高等教育機関が担わなければならない重要な役割のひとつであり、これからの大学を維持するためのひとつの道でもある。

長年にわたって短期大学の情報処理教育と言語文化教育に携わってきた筆者らは、この転換期を迎えている情報教育のあり方と専門教育機関としての役割を検討するため、地域社会の情報教育に対する要望を調査するためのアンケート調査を実施した。子どもに対する学校教育が「行く道を決める、決められる学習」あるいは「他者から評価される学び」であるのに対し、成人や高齢者に対する生涯学習は「生き方のあかしとしての学習」あるいは「自己を評価する学び」であるといわれる¹⁾が、本質的に違う「学び」を想定して回答されることが予測される学生と社会人に対し、敢て同じ内容のアンケート調査を実施した。

山口県が本州最西の地であれば、最東に位置する岩手県宮古市で生涯学習と男女共同参画に対する調査が実施され、その詳細が報告されている²⁾。筆者らは、実施した調査結果を当調査報告書も視野に入れて報告する。

2. アンケート調査の目的と方法

(1)目的

本アンケート調査は、「もし、誰でもがいつでも学ぶことができる場があれば、あなたは学びたいと思いますか」という問いを趣旨として、「専門情報処理を目的

とする短期大学の一学科が、情報処理教育を核としてその教育内容の幅を拡げるとするならば、また、社会人に対しても修学の門戸を拡げるとするならば、その教育を受ける立場にある人々にはどのような要望があるか」を調査することを目的として実施した。

(2)対象者

高等学校生以上の学生と社会人とを対象として調査を実施した。特に高等学校生と社会人とは「はじめに」に述べたように本質的に違う「学び」を想定して回答されることが予想されたが、そのことを踏まえたうえで同じ質問項目で実施した。

(3)調査時期

調査は2003年の8月から10月までの2ヶ月間に実施した。

(4)調査方法

アンケートは高等学校をはじめとする教育機関と企業、各種機関、および直接個人に対し実施し、表1を内訳とする511枚の回答を得ることができた。調査地域は山口県宇部市を中心とする近隣の地域である。表2にその概要を示す。

表1 アンケート調査依頼先および回答枚数

依頼先	依頼数	回答枚数
高等学校	6 校	236 枚
専門学校	1 校	45 枚
企業、医療機関	10 社	107 枚
一 般	—	123 枚
合 計		511 枚

表2 アンケート調査を実施した地域

実施地域(山口県)	依頼先
宇部市	企業 8 社、高校 2 校、専門学校 1 校
吉敷郡小郡町	企業・医療機関 2 社、高校 1 校
山口市	高校 1 校
防府市	高校 2 校

アンケートの質問項目およびアンケート全体の構成の概要を表3に示す。質問の1から3までが回答者の属性である³⁾。質問1の②の「年齢」は、年齢層で修学の希望・内容にどのような違いが観られるかを調査するためにこの項目を設けた。1979年に立教大学がわが国で初めて大学入試に社会人特別選抜制度を導入し⁴⁾、それから20年以上を経過した2002年度には422の大学によって同制度が導入されている⁴⁾が、1990年に全国の大学・短期大学を対象として行われた調査では、志望動機や大学生活の受けとめ方において、例え

表 3 質問事項の概要

質問番号		質問内容と複数回答可否	回答対象
質問 1	①	性 別	全員に質問
	②	年 齢	全員に質問
	③	学生か社会人か	全員に質問
質問 2		高校，短大，大学，専門学校	学生のみに質問
質問 3		現在の職業	社会人のみに質問
質問 4		機会があれば学びたいと思いますか	全員に質問
質問 5		学びたいと思わない理由	質問 4 で「思わない」と答えた人のみに質問
質問 6		学ぶ主な目的（複数回答可）	質問 4 で「思う」と答えた人のみに質問
質問 7		希望する就学形態（複数回答可）	
質問 8		希望する曜日，時間帯（複数回答可）	
質問 9		学ぶことができる期間	
質問 10		学びたい内容（複数回答可）	
質問 11		取得したい免許・資格（複数回答可）	

表 4 回答者数の内訳

	高校生	高校生以外	合 計
女 性	132 (67.5%)	189 (60.2%)	321 (62.8%)
男 性	65 (32.5%)	113 (36.0%)	178 (34.8%)
空 白		12 (3.8%)	12 (2.3%)
合 計	197	314	511

ば30歳代は「専門指向」「実用指向」が他の年代より高いとか、40歳代では「家庭に埋もれたくない」や「余暇の活用」を志望動機とする回答者が他の年齢層よりも明瞭に多いなど、それぞれの年齢層に特色があることが報じられている¹⁾。筆者らの調査では、回答項目は10代から60代までを10歳区切りとし、70代以上をひとつとして7つの選択肢とした。

3. 結果および考察

3.1 回答者の内訳

今回実施したアンケート調査の回答者総数は表 4 に示すように511名であり、その内、高等学校生は197名で、314名が高校生以外である。高校生以外の314名の回答者の概要は表 4 に示すとおりである。「学生か社会人か」の質問に対する回答が未記入であった16名の回答結果については、貴重な回答結果であり、ほぼ社会人からと推察できたので、以降の質問の集計においても、社会人からの回答として集計に加えた。

表 5 より年代別回答者数を観ると、70代以上の回答者が 4 名と、他の年代と比較して非常に少なく、この数の調査データで70代の傾向を論じることにはできない

と判断された。そこで、年代別の傾向を調べる際には、60代のデータと70代のデータとを統合し、60代・70代として考察することとした。各年代の平均回答者数は52.0人であり、標準偏差は15.2である。

高校生以外の学生と社会人との割合は、学生が15.3%，社会人が79.6%であり、社会人に未記入者を加えると、およそ85%である。

高校生以外の回答者の内、48名の「学生」と答えた回答者については、質問 2 でその内訳が分かる質問構成になっており、48名中42名は専門学校生であり、他、大学生および短期大学生の回答者が 5 名あることが分かっている。

3.2 「学べる機会があれば学びたいと思われませんか」に対する回答結果

「学べる機会があれば学びたいと思われませんか」という、本アンケート調査にとってはもっとも基本的な質問に対する回答は、高校生と高校生以外とで大きな違いがある。本稿の「はじめに」にもふれたように、本質的に異なる「学び」を想定されて回答されることが予測される高校生と社会人とでは違いがあるのが当然であり、高校生の回答は、多くの高校生が卒業後進学を考えている現状のなかで、自らを再度見つめての結果であろう。

図 2 に高校生と高校生以外の本質問に対する回答結果を示す。

全体的には「学びたいと思う」と答えた人は59.5%，約60%であり、高校生と高校生以外ではそれぞれ、42.

表5 高校生以外の回答者数の内訳

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	空白	学生	社会人	空白	合計
女性	27	54	28	21	37	18	2	2	41	141	7	189
男性	4	20	27	22	26	13	1		7	101	5	113
空白		1		3	3	4	1			8	4	12
合計	31	75	55	46	66	35	4	2	48	250	16	314

6%, 71.0%となっている。

次に高校生を含めた全体で男女の比較をしてみると、個人データの内の性別を答えなかった12名の回答者を除く499名の回答者の内、女性321名、男性178名と総数では大きな差があるにもかかわらず、この両者の回答者数の割合は、図3に示されるように非常に近い割合でそれぞれの回答が分布している。後で出てくるいくつかの質問に対する回答結果には男女の差が顕著に現れている結果もあり、このもっとも基本的な質問に対し、女性も男性もほぼ同じ傾向の回答であったことは、非常に特徴的な結果であるということができるとはなかろうか。

次に、本質問に対する高校生の回答について観ると(図4)、高校生の「学びたいと思う」割合は全体で42.6%であり、男性は49.2%、女性は39.4%と、男性の方がおよそ10%高い率を示し、学びたくないという割合は女性が男性より8.1%高い率を示している。

性別の質問に対し回答のあった高校生以外の302名の回答で、男女の回答の差を観ると、図5に示すように、「学びたいと思う」と答えた人は女性が73.5%、男性が65.5%であり、高校生の場合とは逆に、女性が男性より8%多いという結果が得られた。そして、「思わない」は5.3%、「わからない」は3.8%男性が多い結果になっている。

次に高校生以外の、「学びたいと思う」と答えた人の各年代ごとの回答者総数に対する割合の年代による変化を観てみると、図6のような結果が得られた。現在学んでいる回答者の10代がもっとも低く54.8%であり、20代で73.3%と上がり、30代、40代ではほぼ70%に落ち着き、50代でもっとも高い77.3%を呈する。60代・70代では70%程度に低下する。高校生は高校生以外の10代より12.2%低い42.6%である。

3.3 「思わない理由」に対する回答結果

「学びたいと思わない理由」を問う質問に対しては、

図7に示すように、全体的には「時間がない」「必要性がない」「他にしたいことがある」がほぼ25%同率で、「経費がかかる」がその2分の1の12.5%である。それに対し高校生は、「必要性がない」が最高率で34.1%である。この回答は、現在すでに学んでおり、さらに将来も進学の手配であれば、それ以上には、あるいはそれ以外には学ぶ必要がないという回答者自身の現況による回答結果であろうと考えられる。また、高校生の回答では「他にしたいことがある」と答えた人が29.3%と、高校生以外の17.9%に比較して高い回答率になっている。高校生以外では、「時間がない」が35.9%と、最高率であり、「必要性がない」の20.5%、「他にしたいことがある」の17.9%、「経費がかかる」の12.8%がそのあとに続く。

男女間を比較した結果は、全体の結果を図8、高校生を図9、そして高校生以外を図10に示す。これらの結果については高校生の回答が特徴的で、男子は「必要性がない」が70%を占め、他は「高校生以外」と「(空白)」以外に回答はない。ただし、この「必要性がない」の回答者数は10名である。男子の回答結果に対し高校生女子ではこの質問に対し31名の回答があり、その回答内容も高校生以外の回答の傾向に類似している。高校生以外では、男性は「時間がない」が44.4%と最高率を占め、そのあと、「必要性がない」「経費がかかる」「他にしたいことがある」が続く。女性は「他にしたいことがある」が最高率で、そのあと、「時間がない」「必要性がない」「経費がかかる」が続く。この「思わない理由」は男女の差が回答結果に顕著に現れた質問である。

本質問の回答項目「その他」の欄に記載された事項は次の3件である。

「会社経営に専念」「興味がないから」(2人)「情報は今高校で習っているので必要ない」。

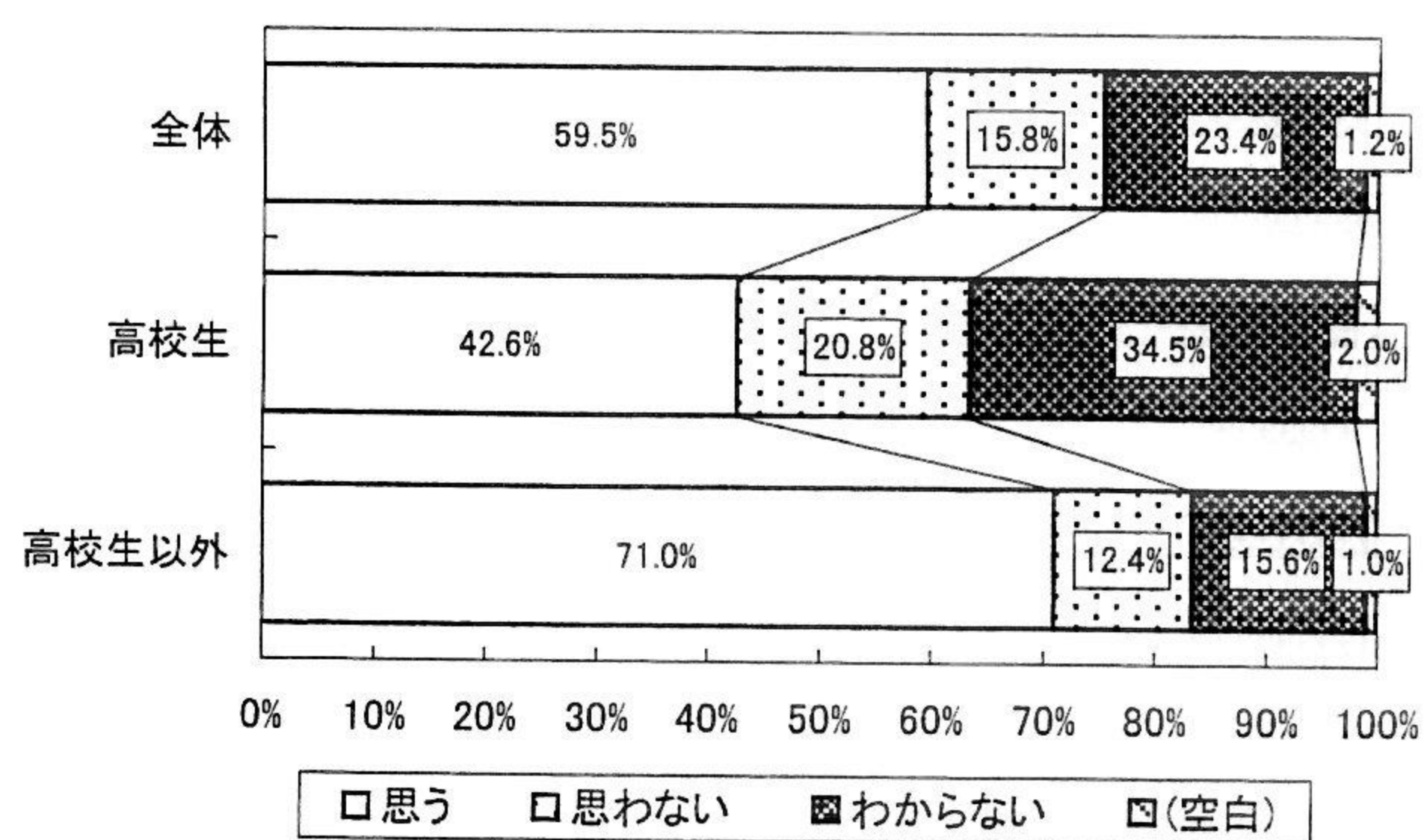


図2 「学べる機会があれば学びたいと思われますか」に対する回答（高校生と高校生以外）

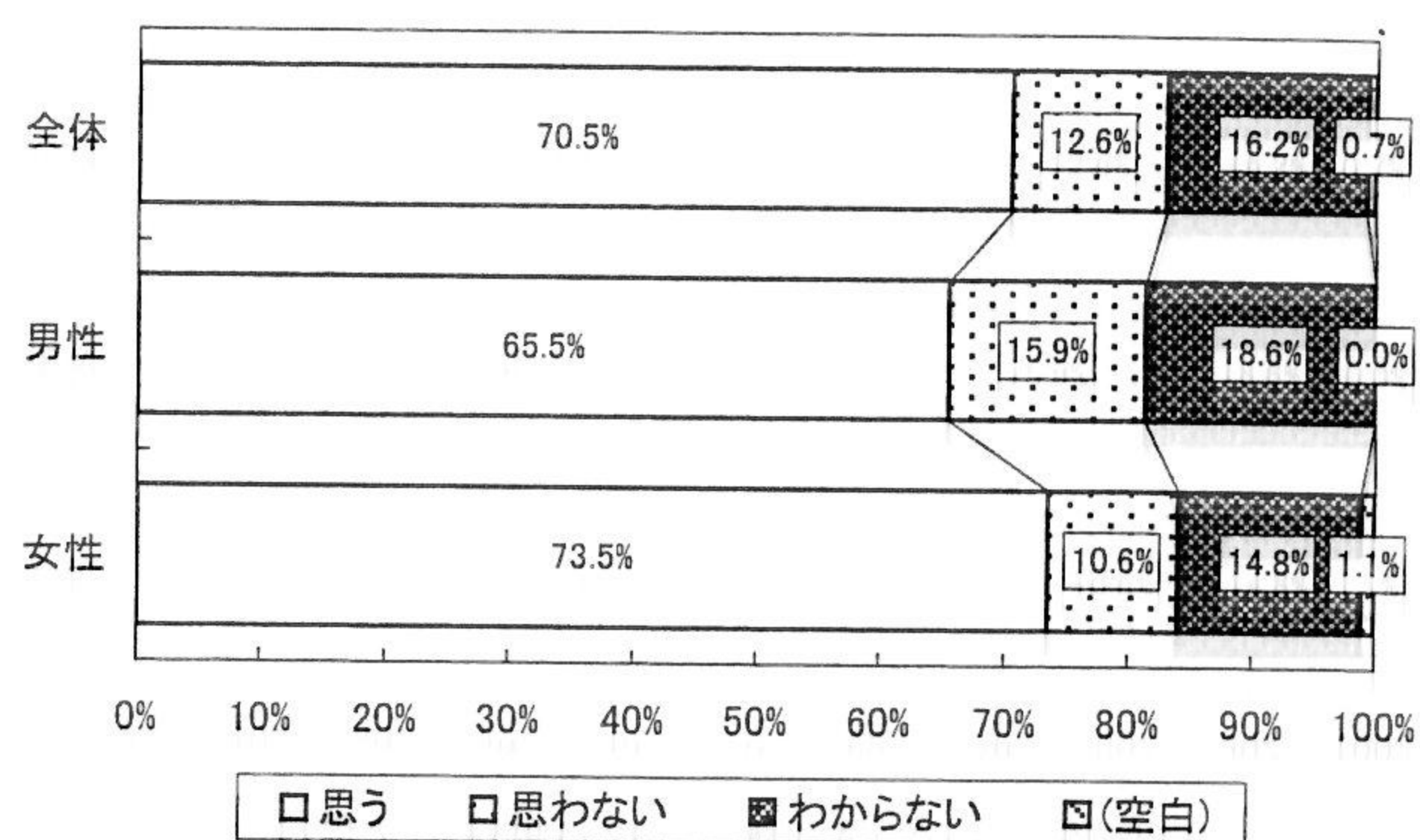


図5 「学べる機会があれば学びたいと思われますか」に対する回答（高校生以外・性別）

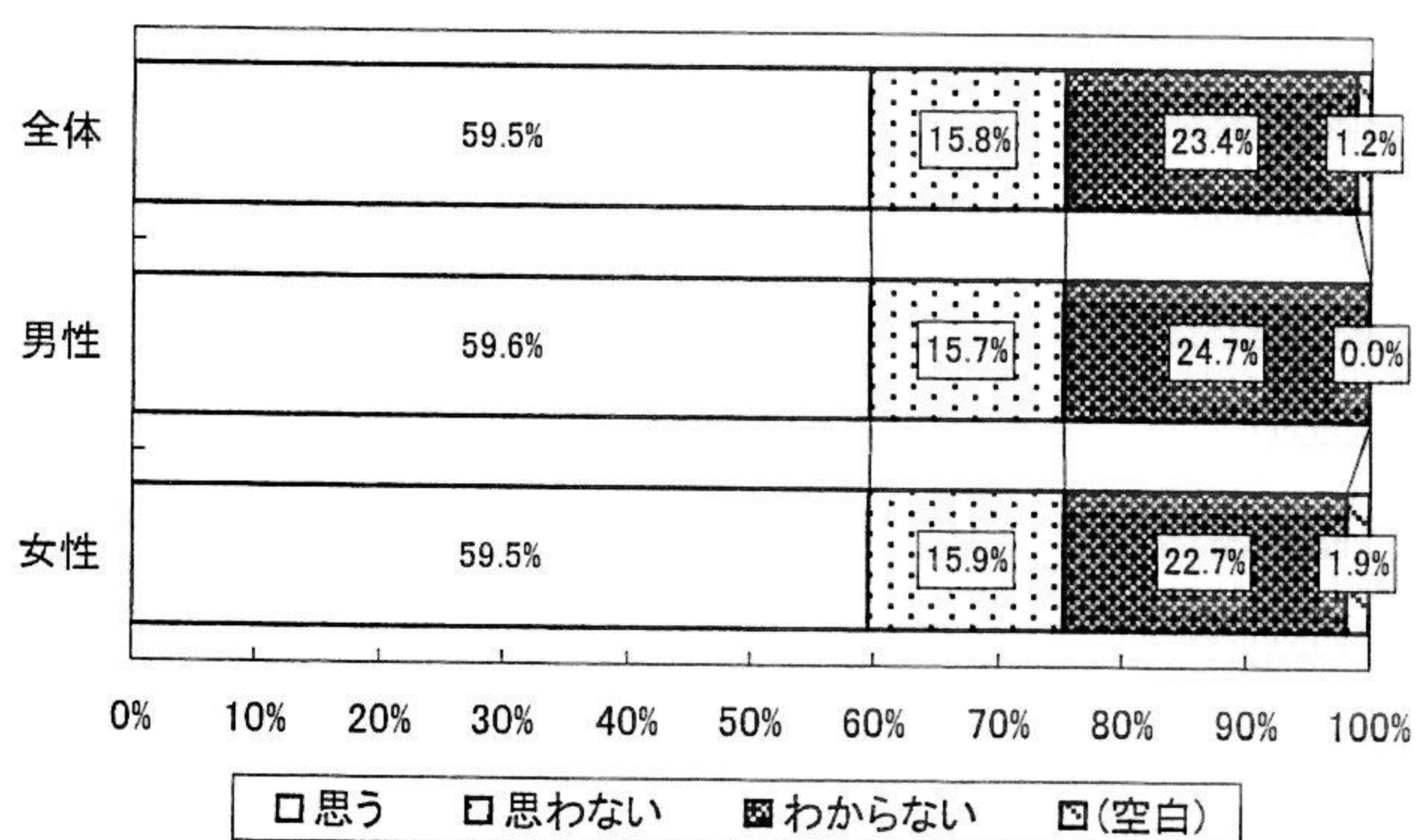


図3 「学べる機会があれば学びたいと思われますか」に対する回答（全体・性別）

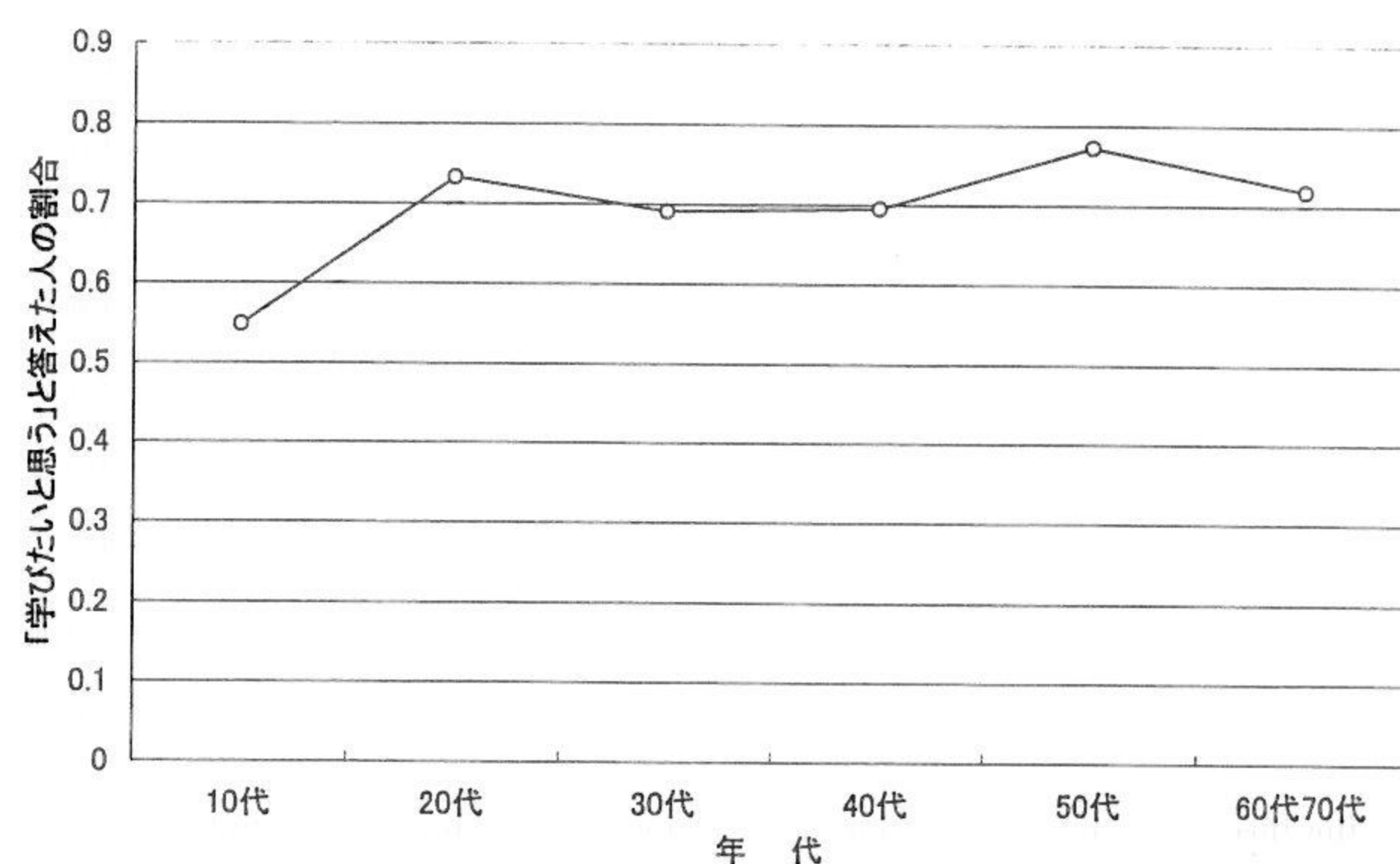


図6 「学びたいと思う」に回答した人（高校生以外）の年代による変化

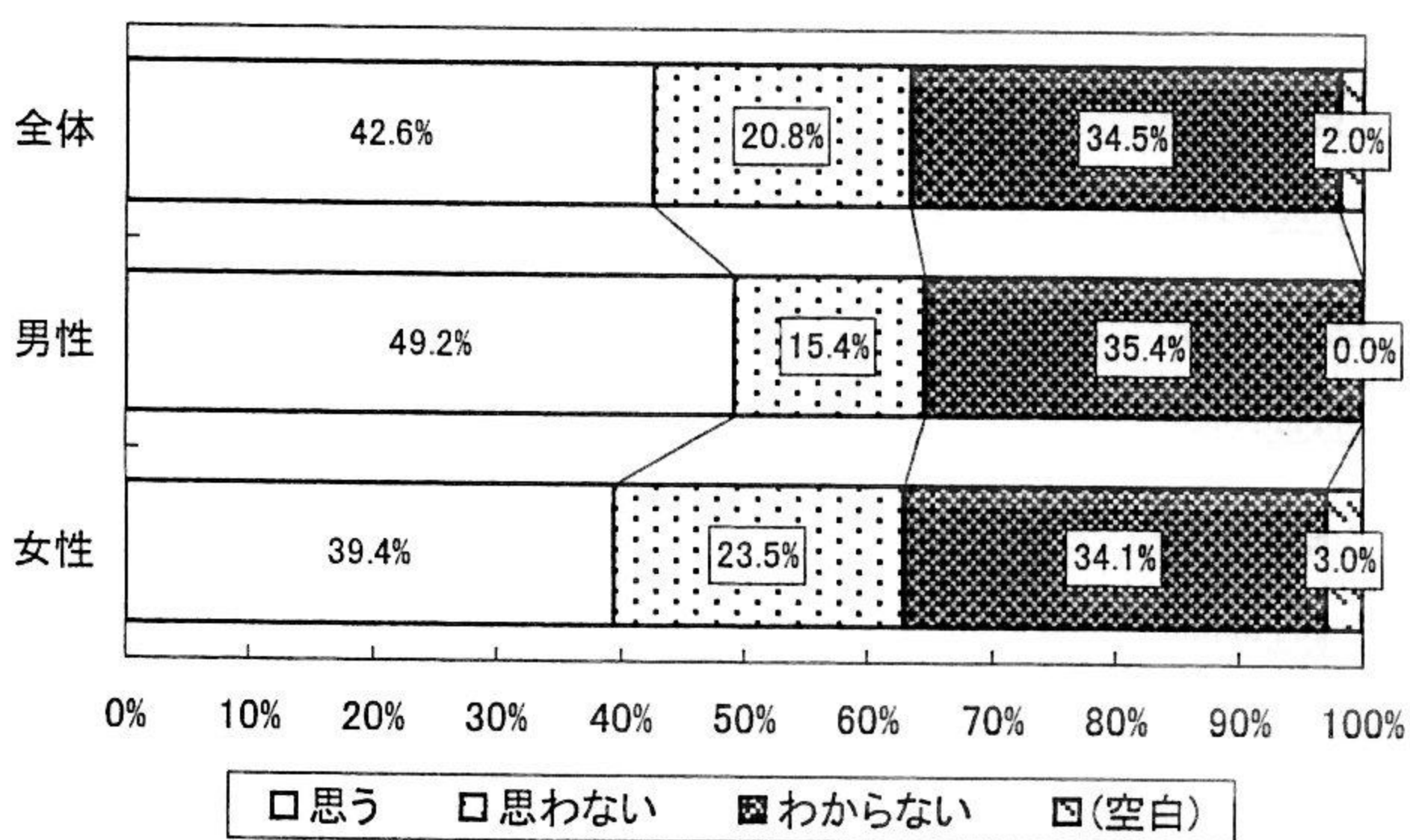


図4 「学べる機会があれば学びたいと思われますか」に対する回答（高校生・性別）

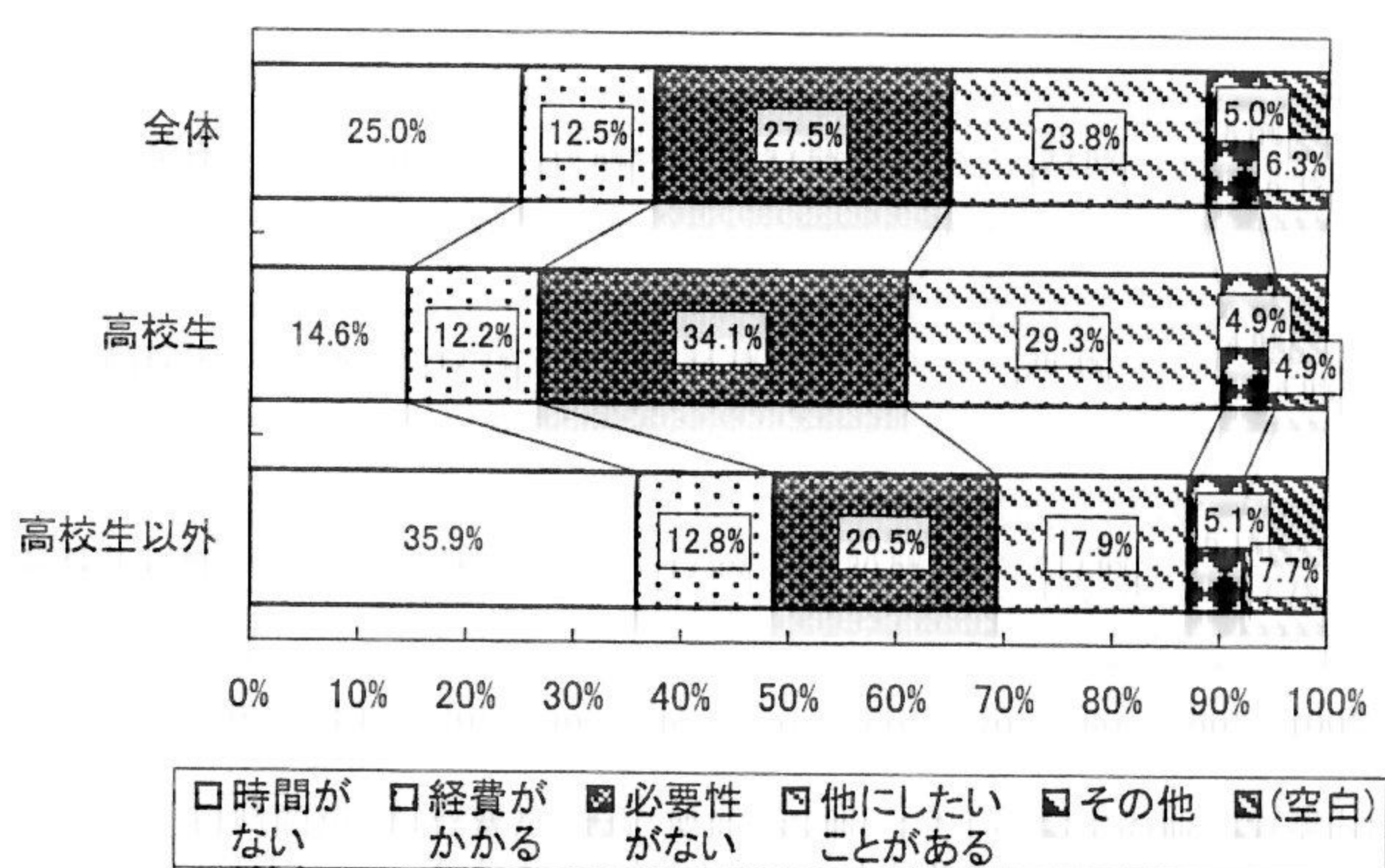


図7 「学びたいと思わない理由」に対する回答（高校生と高校生以外）

3.4 「学ぶ主な目的」に対する回答結果（複数回答を可とする）

複数回答を可とする「学ぶ主な目的」に対する回答は図11に示すように、全体的には「知識・技術を身につける」が最高率で、44.8%を占める。次に「資格を取る」が32.0%を占め、両者でおよそ77%を占める。他は「時間を有効に使う」がおよそ10%、「転職・就職」が6.4%、「経験を得る」が4.0%となっている。

高校生の場合、「資格」が41.9%と第1位、2位が「知

識・技術」で、36.6%である。3位の「経験を得る」が8.4%で、高校生以外が1.4%であるのに対し高い率を占めている。

高校生以外では、「知識・技術」がおよそ50%と、最高率で、「資格」が26.0%に落ちる。「時間を有効に使う」は高校生が4.4%であるのに対し、13.3%と、高くなっている。「転職・就職」は高校生も高校生以外もほぼ同率で6%強といったところである。

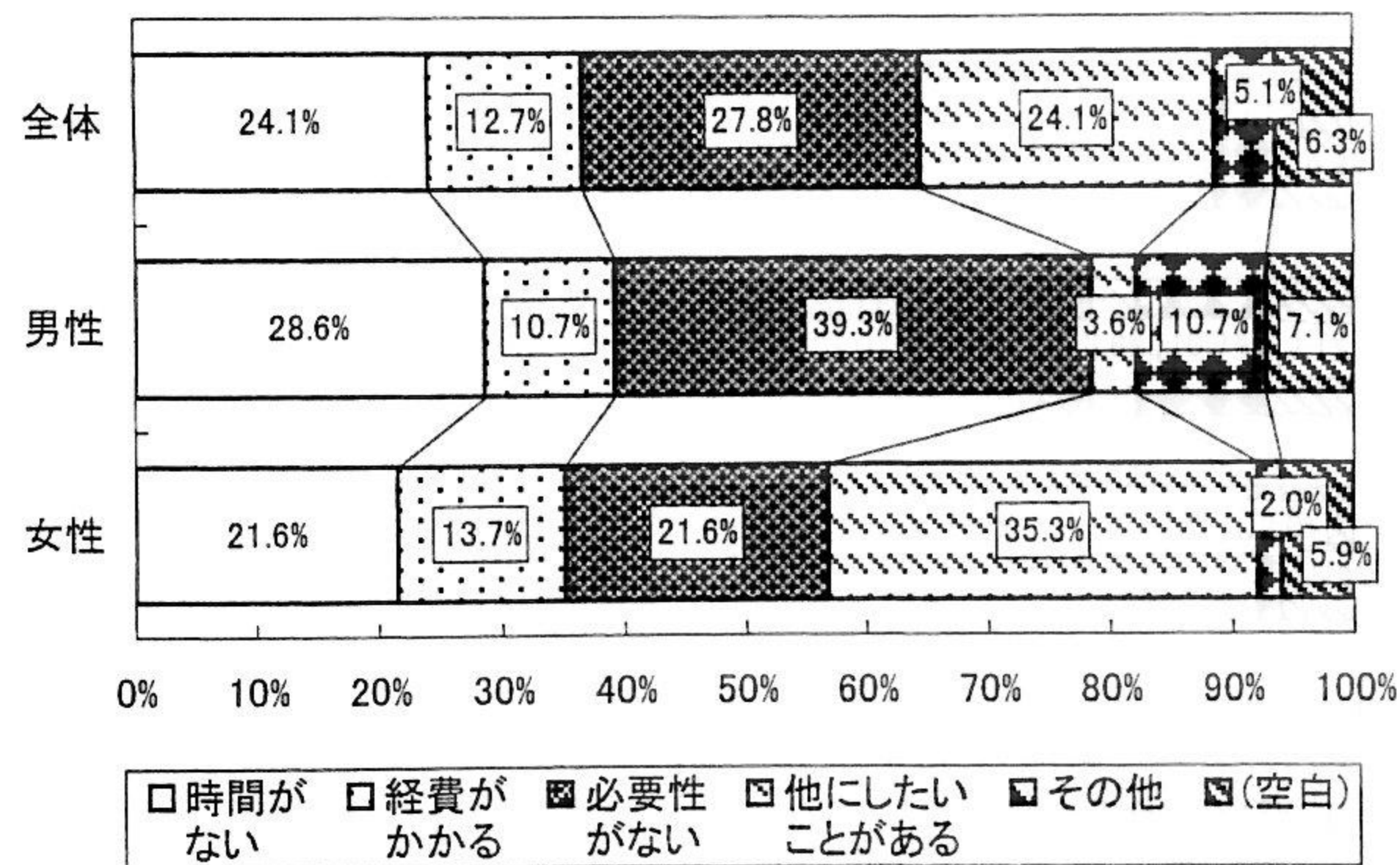


図8 「学びたいと思わない理由」に対する回答（全体・性別）

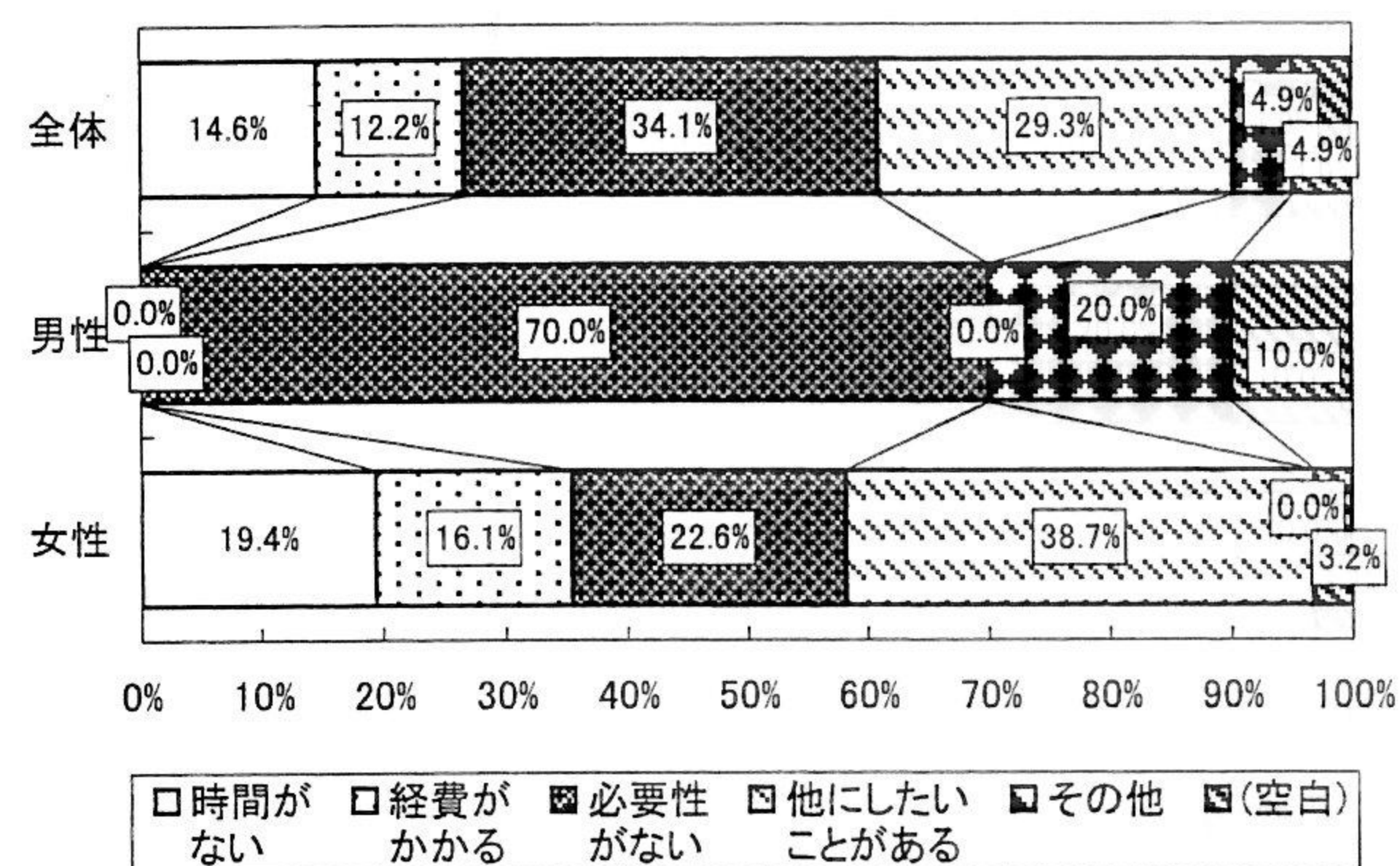


図9 「学びたいと思わない理由」に対する回答（高校生・性別）

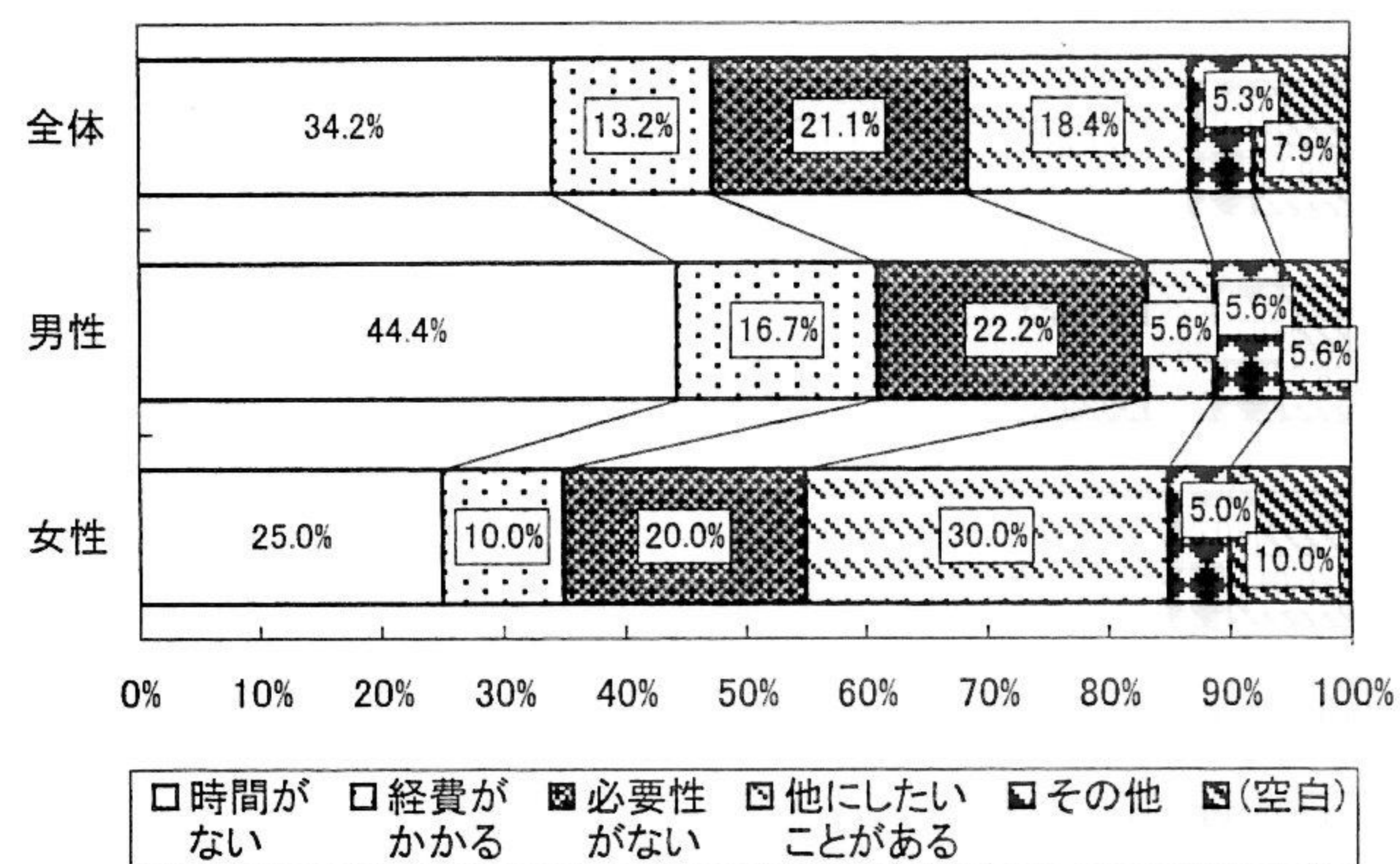


図10 「学びたいと思わない理由」に対する回答（高校生以外・性別）

男女差を観るための集計結果は図12, 13, 14に示すとおりである。差が顕著に観られるのは高校生であり、高校生以外はほぼ同じ傾向を示す。高校生の場合、女性は「資格を取る」が48.0%と、最高率であるのに対し、男性は「知識・技術を身につける」が44.2%で1位であり、女性の回答とは1位と2位が逆転している。男性も女性も両者の合計はおよそ75%から80%とな

る。高校生以外でも両者の合計は高校生の場合と同程度の75%位であるが、男性も女性も「知識・技術を身につける」が50%前後で、「資格を取る」がその2分の1の25%前後となっている。

図15は高校生以外の「学ぶ主な目的」の年代による変化を示す。年代別のデータについては、図6と同様、各年代ごとの回答者総数に対する割合である。「知識・技術を身につける」が全ての年代を通して1位を占めるが、「時間を有効に使う」が10代の0%から徐々に増加し、60代・70代では36.4%になる。

本質問の回答項目「その他」の欄に記載されたことは次の6件である。

「日々の発達」「教養を身につける」「今の仕事に役立てたい」「人間は生涯学習」「精神的に豊かになりたい」「専門学校」。

3.5 「希望する就学形態」に対する回答結果（複数回答を可とする）

複数回答を可とする質問「希望する就学形態」に対する回答は、図16に示すように、高校生では「教育機関で」が最高率を占め51.1%で、およそ5割、高校生以外では「教育機関で」はおよそ6%で、第4位に落ちる。高校生以外では「好きな科目だけ」が48.0%、これもおよそ5割で、これが第1位である。高校生の2位は「好きな科目だけ」で、3位は「資格取得」であるのに対し、高校生以外では、「資格取得」と「働きながら」がおよそ20%で、2位と3位を占める。

「希望する就学形態」の男女の差を図17, 18, 19に、高校生以外の年代による変化を、図20にそれぞれ示す。男女の差は「学ぶ主な目的」と同様、高校生に顕著な差が観られる。高校生の場合は、男性は「教育機関で」が63.3%と最高率であるのに対し、女性はそれが45.0%と下がり、他の「好きな科目だけ」や、「資格取得」、「働きながら」などの率が男性より高くなる。男女全体では「教育機関で学びたい」がほぼ50%である。「市販教材で独学」は高校生の場合はほとんど0%に近い。

本質問に対する回答も年代による変化については高校生以外を対象とした。これによると、「好きな科目だけ」を選択した割合が全年代を通して1位であり、40代までは40%を上下するが、50代からは70%を超える。

「資格取得を目的とする就学」は、30代までは30%弱を占め第2位であるが、40代から徐々に減少し、50代からは5%以下に落ちる。「働きながら長期間かけて学ぶ」は、10代は12.5%であるが、20代から50代までは

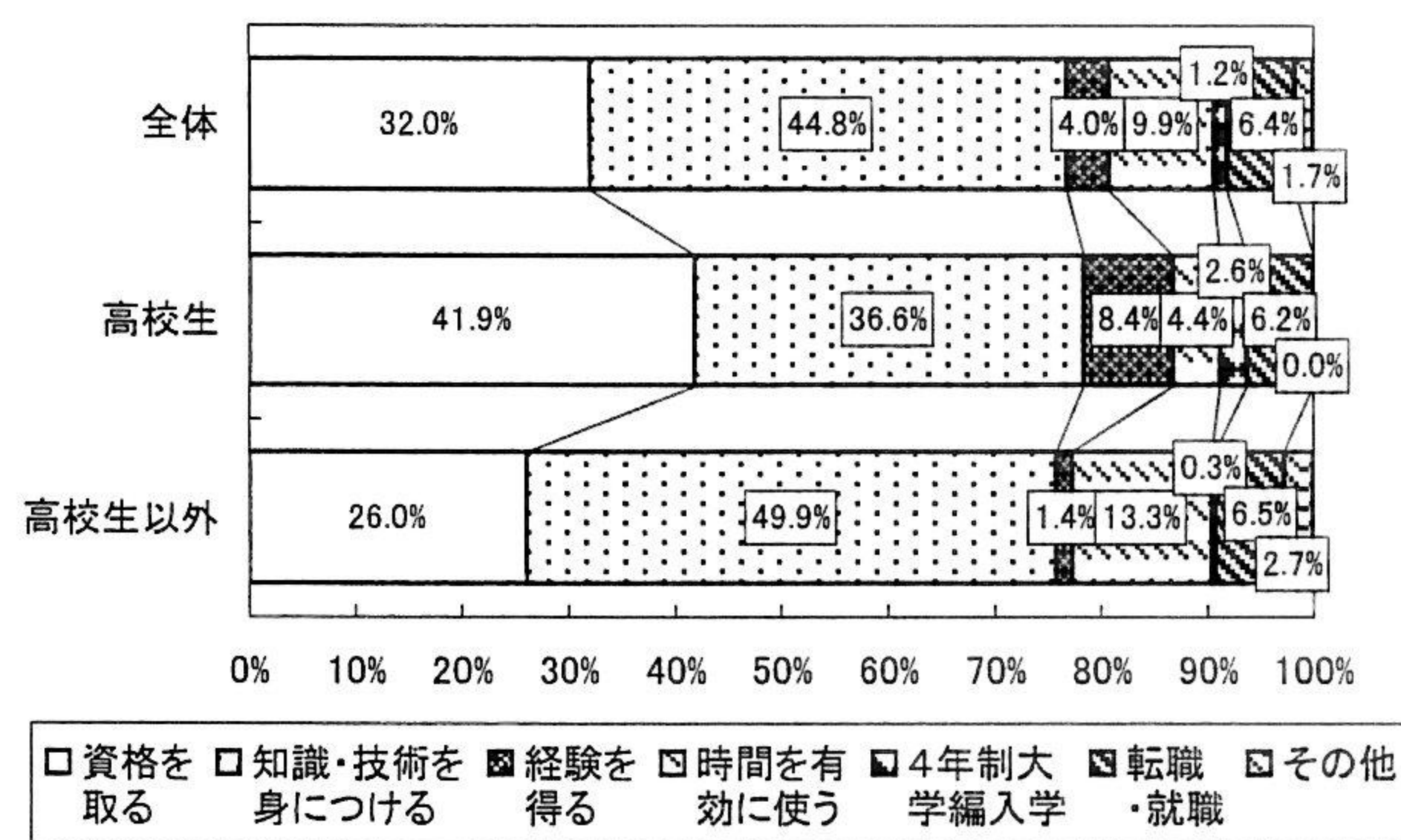


図11 「学ぶ主な目的」に対する回答（高校生と高校生以外）

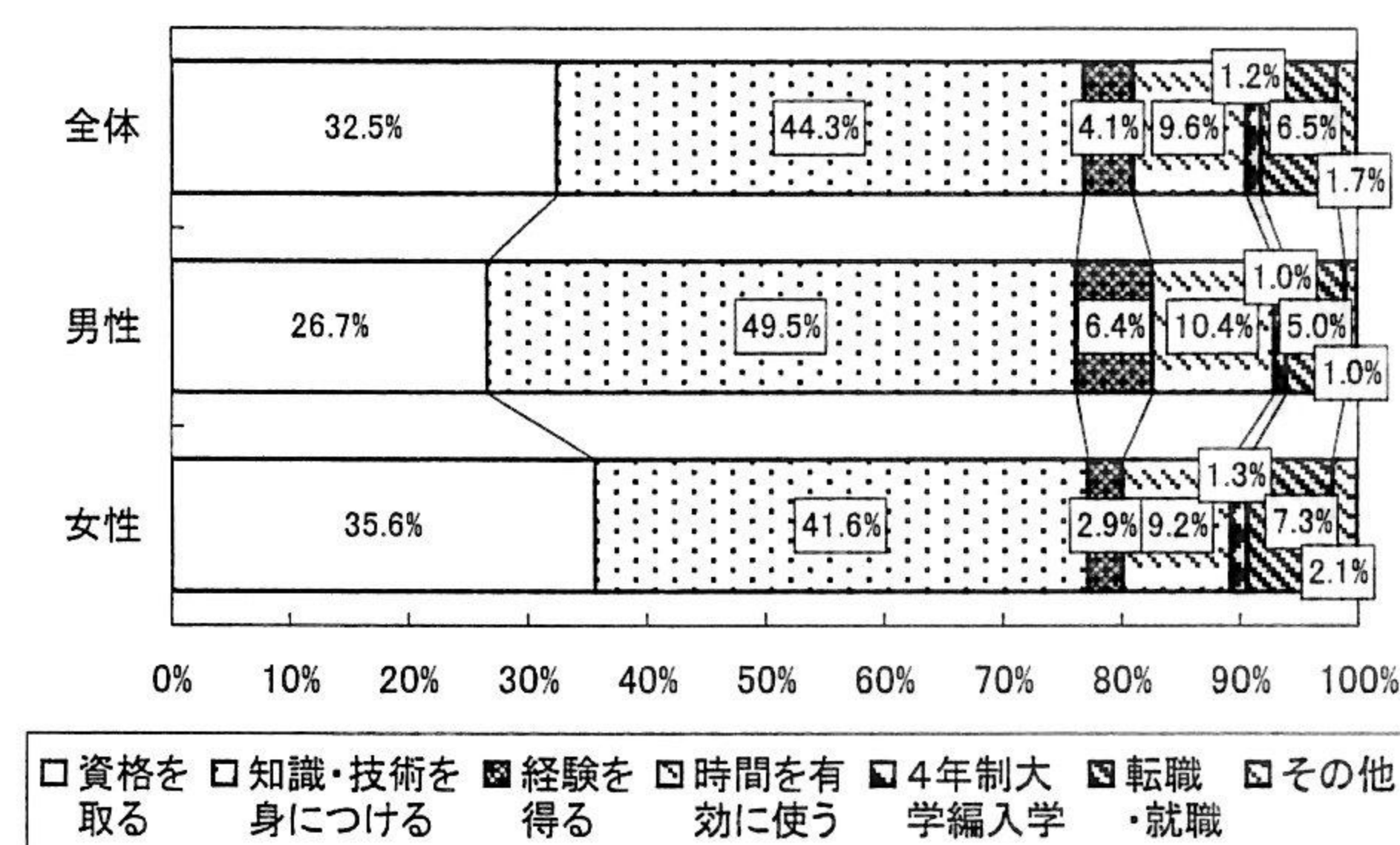


図12 「学ぶ主な目的」に対する回答（全体・性別）

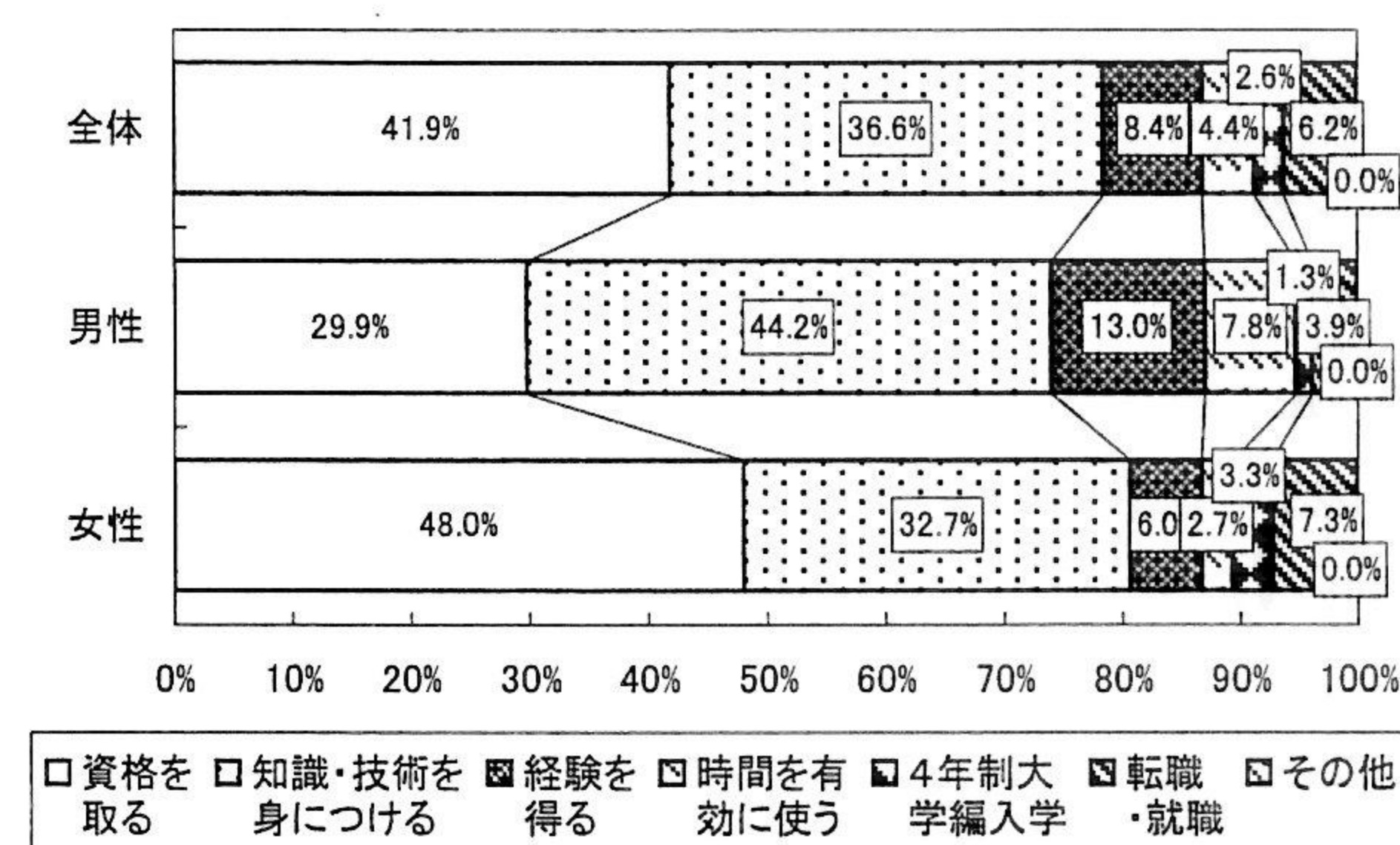


図13 「学ぶ主な目的」に対する回答（高校生・性別）

20%を±5%の範囲で変化し、50代から減少の傾向を示し、60・70代で10%以下に落ちる。

本質問の回答項目「その他」の欄に記載された事項は次の5件である。

「ワークショップ・ゼミ形式」「講演、講習会」「在宅学習、質問サポート体制」「大学院」「留学」。

3.6 「都合の良い曜日と時間帯」に対する回答結果（複数回答を可とする）

「都合の良い曜日と時間帯」は図21に示されるように、高校生では半数以上の52.8%が「平日昼間」で、

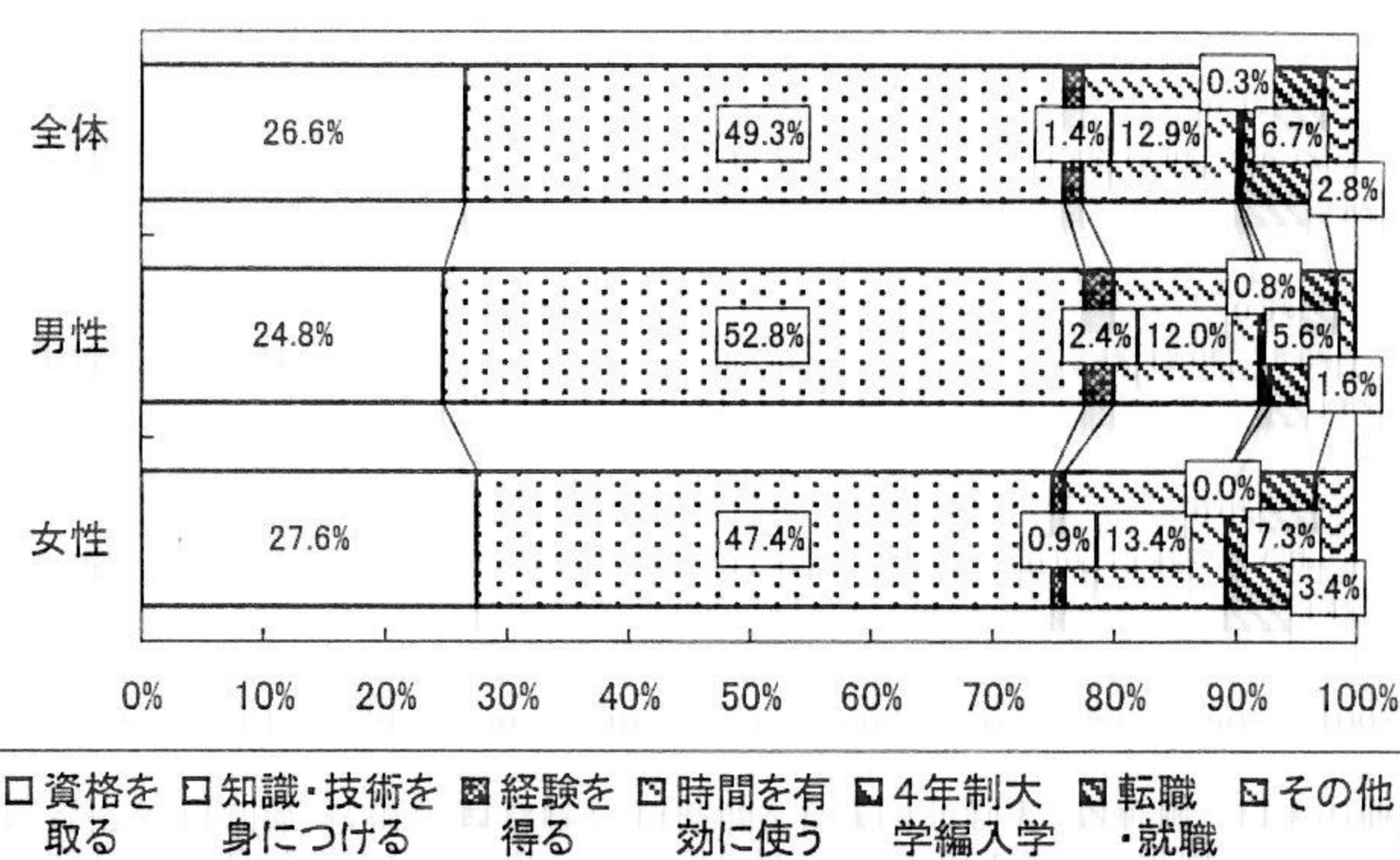


図14 「学ぶ主な目的」に対する回答（高校生以外・性別）

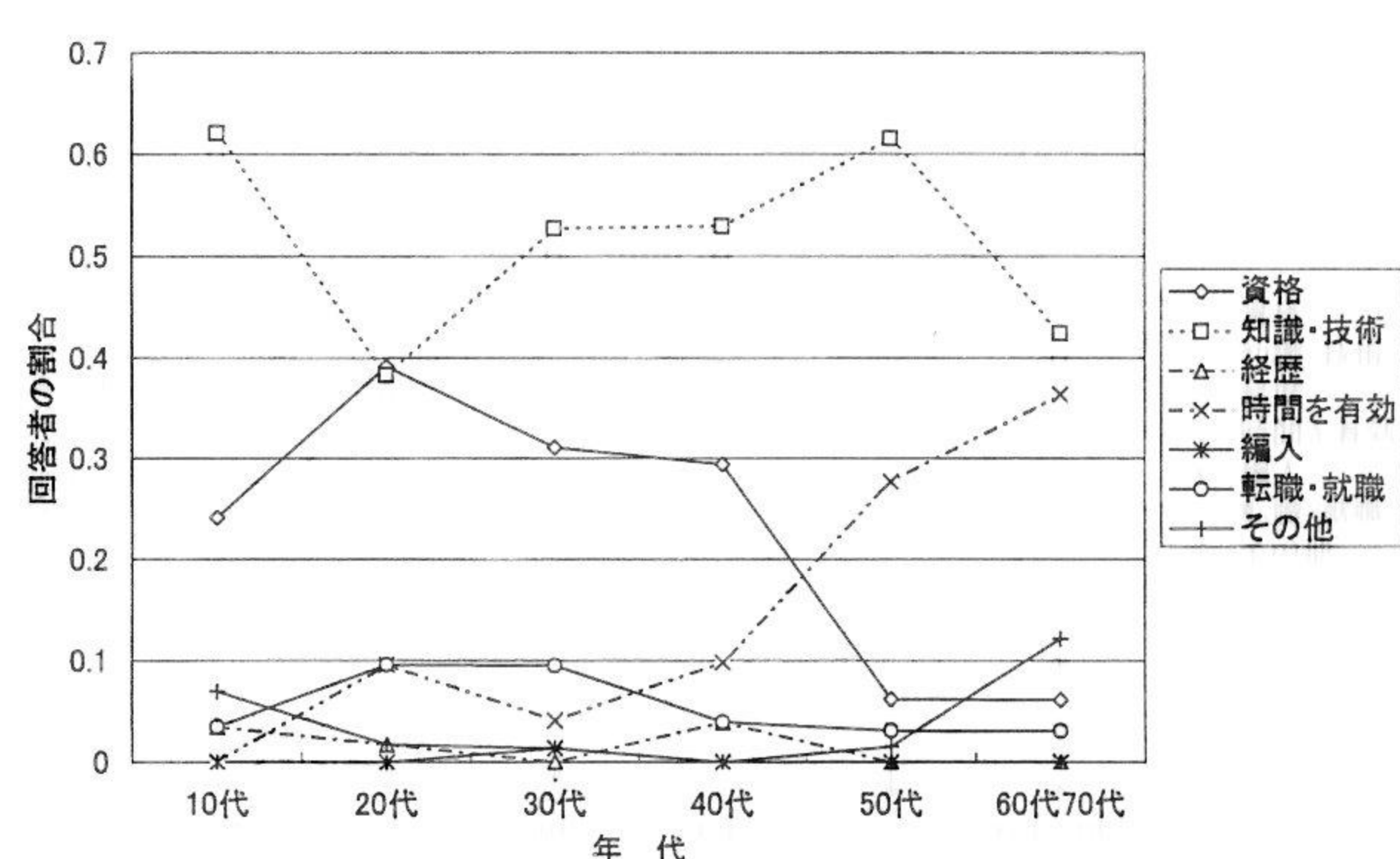


図15 「学ぶ主な目的」(高校生以外)の年代による変化

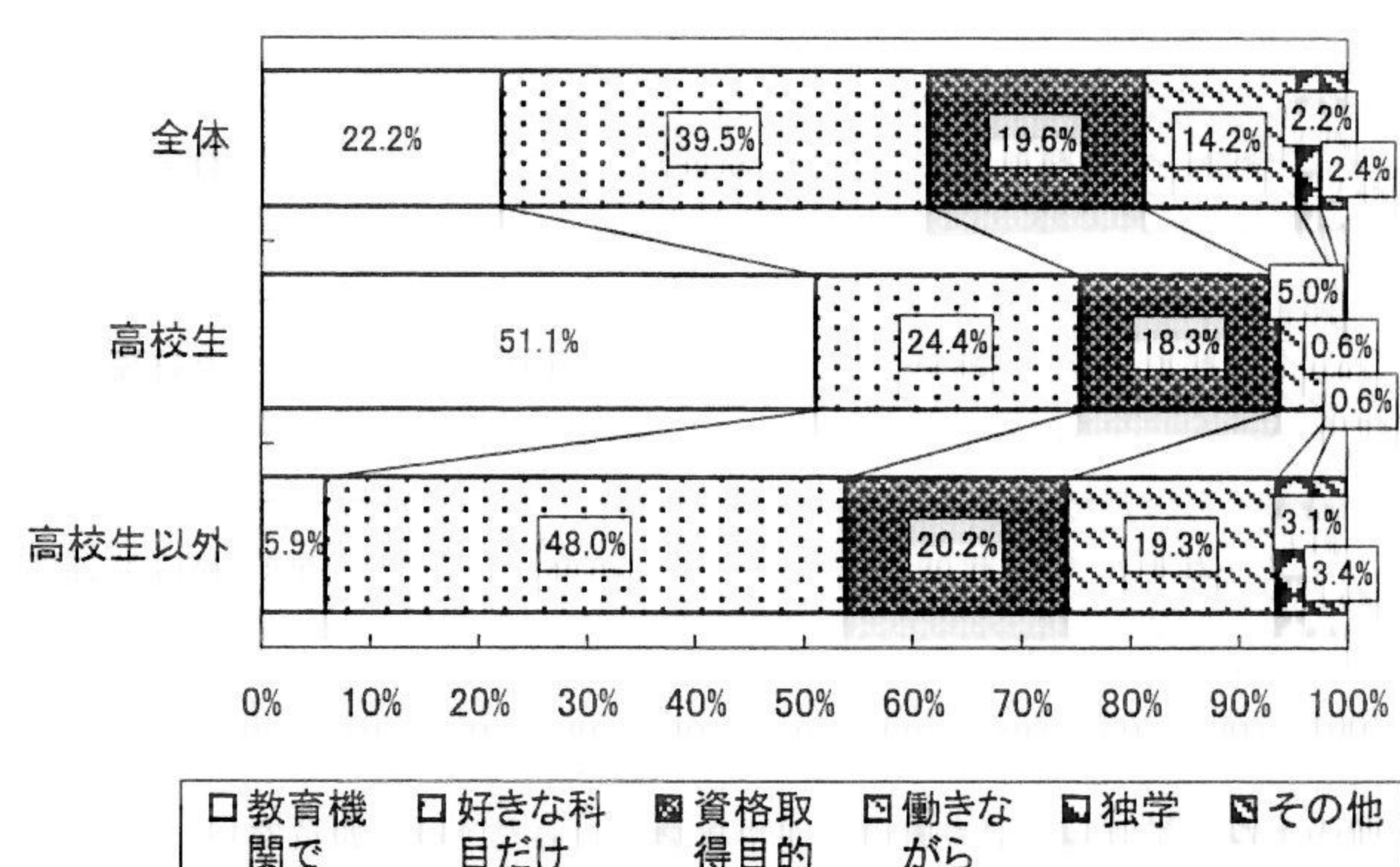


図16 「希望する就学形態」に対する回答（高校生と高校生以外）

他は「日曜日夜間」を除いて10%前後で、「日曜日昼間」が11.7%で第2位である。高校生以外では、「平日夜間」が最大で、33.6%を占め、「平日昼間」「土曜日昼間」「土曜日夜間」と続くが、三者はほぼ同率で15%強である。「日曜日昼間」は10.7%で第5位である。「日曜日夜間」はいずれも5%以下である。

男女の差は図22, 23, 24に示すように、全体では、まず、女性は平日の昼夜のトータルが56.7%であるのに対し、男性は51.1%で、男性が女性より5%程度低く、土曜日の昼夜のトータルは男性が女性より5%程

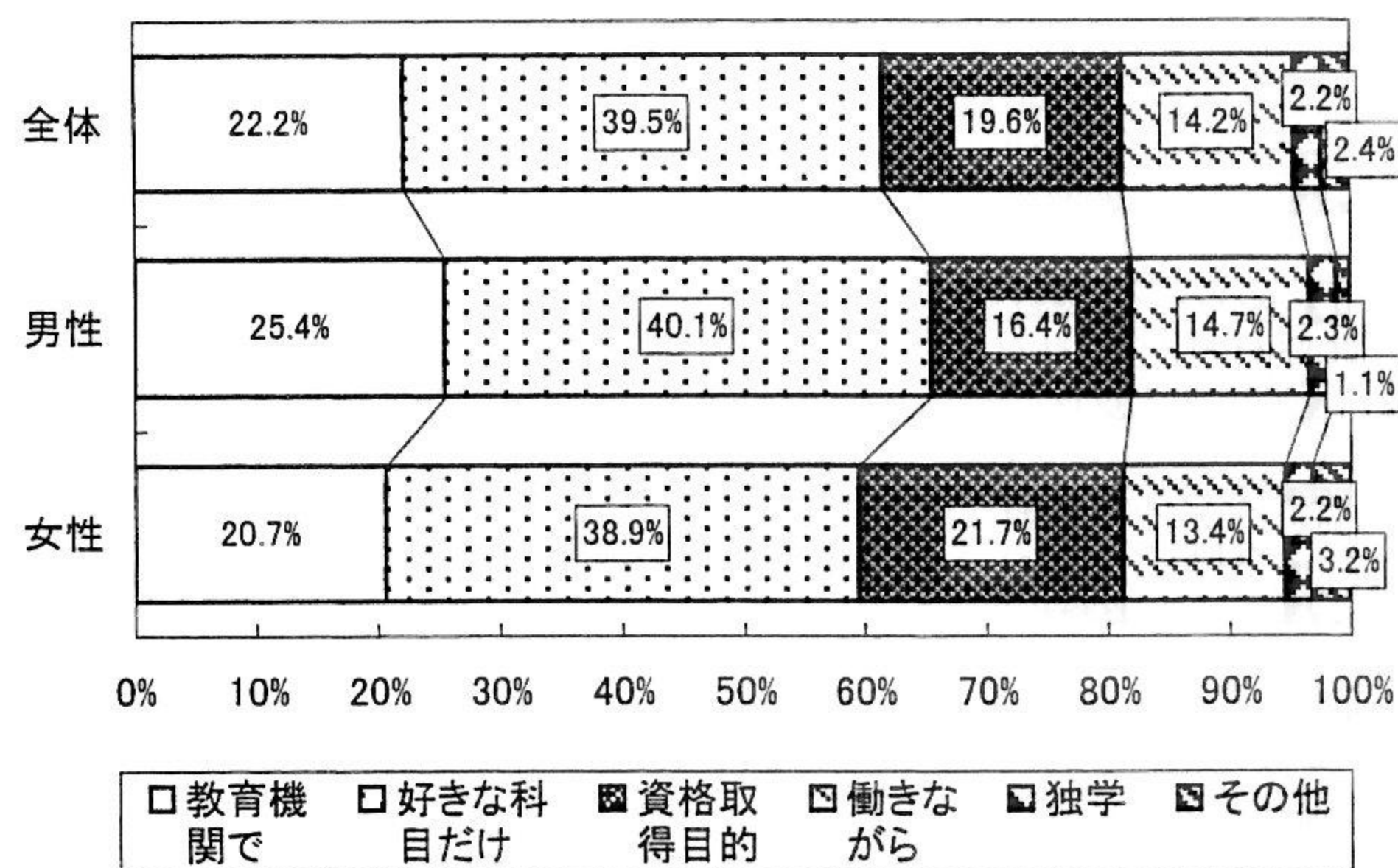


図17 「希望する就学形態」に対する回答（全体・性別）

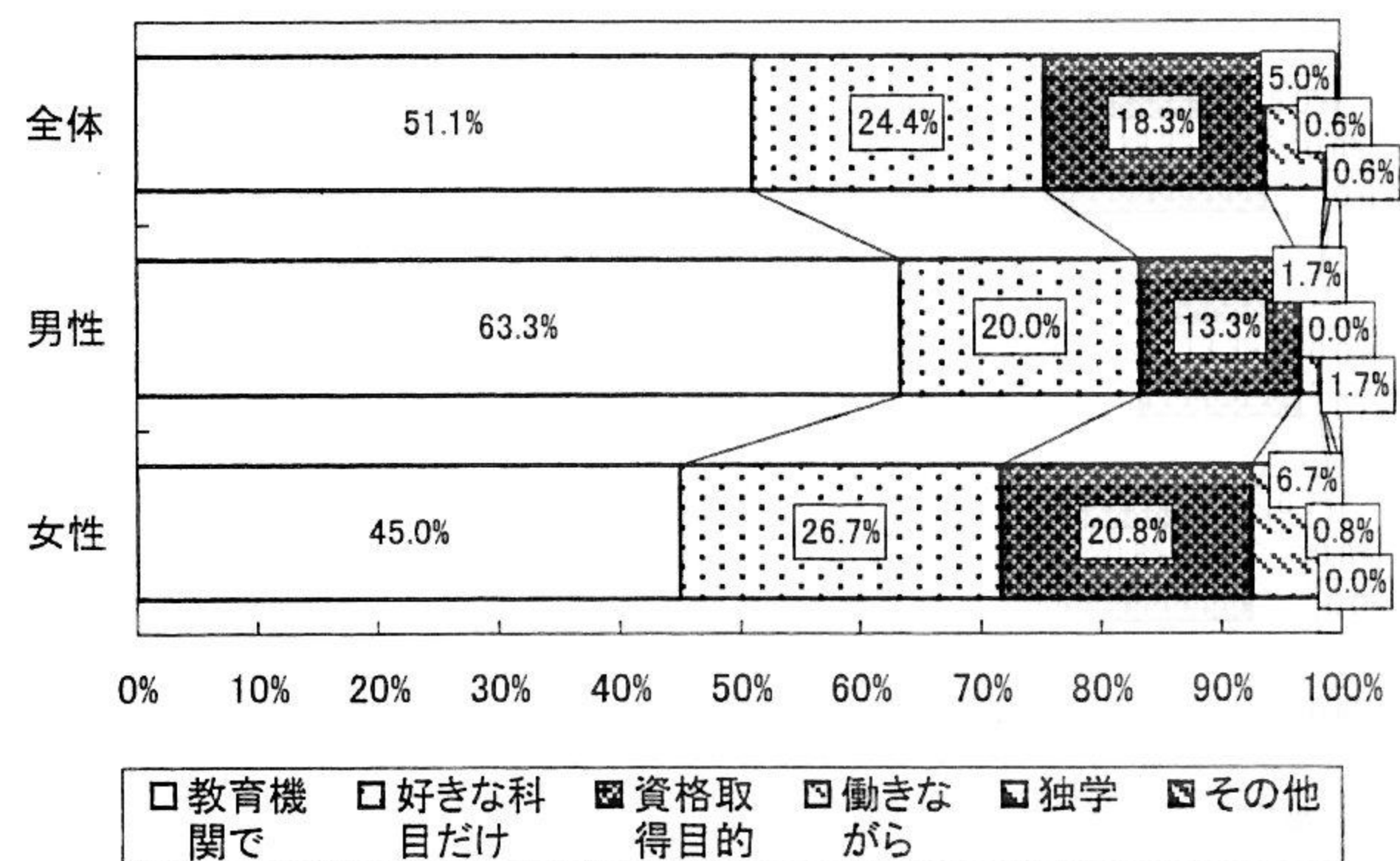


図18 「希望する就学形態」に対する回答（高校生・性別）

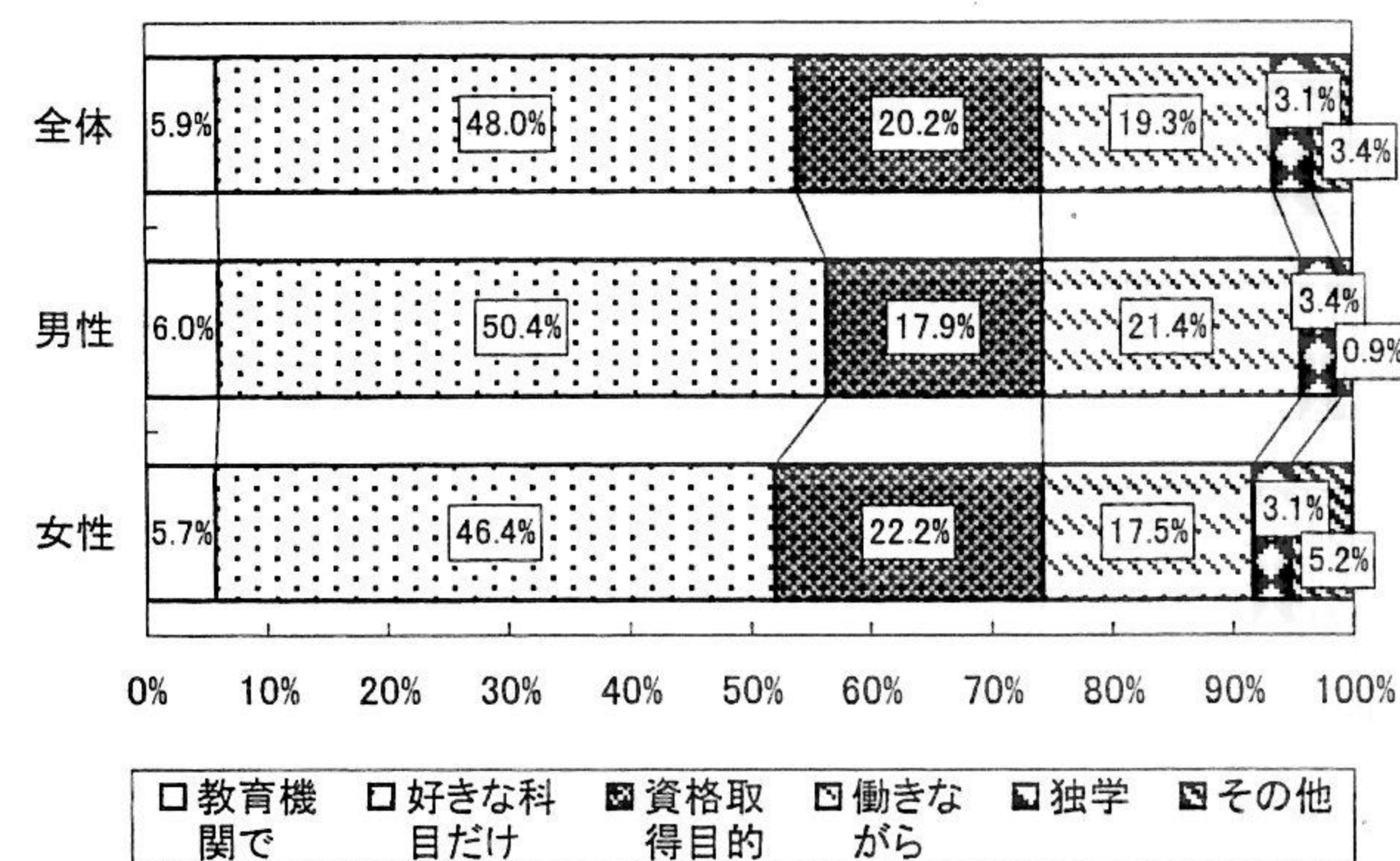


図19 「希望する就学形態」に対する回答（高校生以外・性別）

度高い30.9%を示す。女性の土曜日の昼夜のトータルは25.7%である。日曜日の昼夜のトータルは男性が16.3%、女性が15.4%で1%程度の差である。昼間と夜間では、平日で、男性は夜間が昼間より3.9%高い率であるのに対し、女性は昼間が6.1%高い率を示している。土曜日においても男性は夜間が2.9%高率であるのに対し、女性は昼間が1.3%高い率を示している。日曜日は男性も女性も昼間が夜間の率より2倍以上高くなっており、男性は3倍程度である。

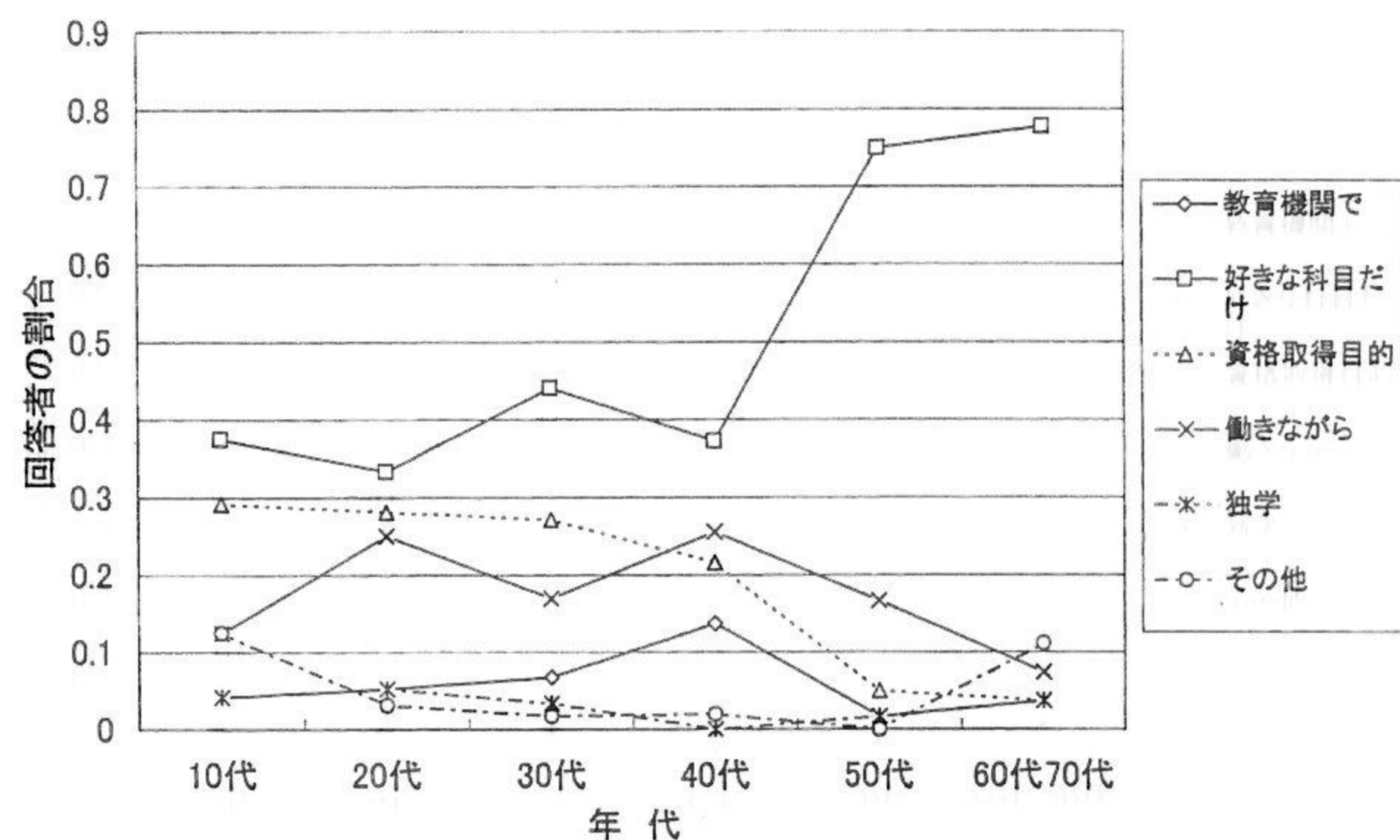


図20 「希望する就学形態」(高校生以外)の年代による変化

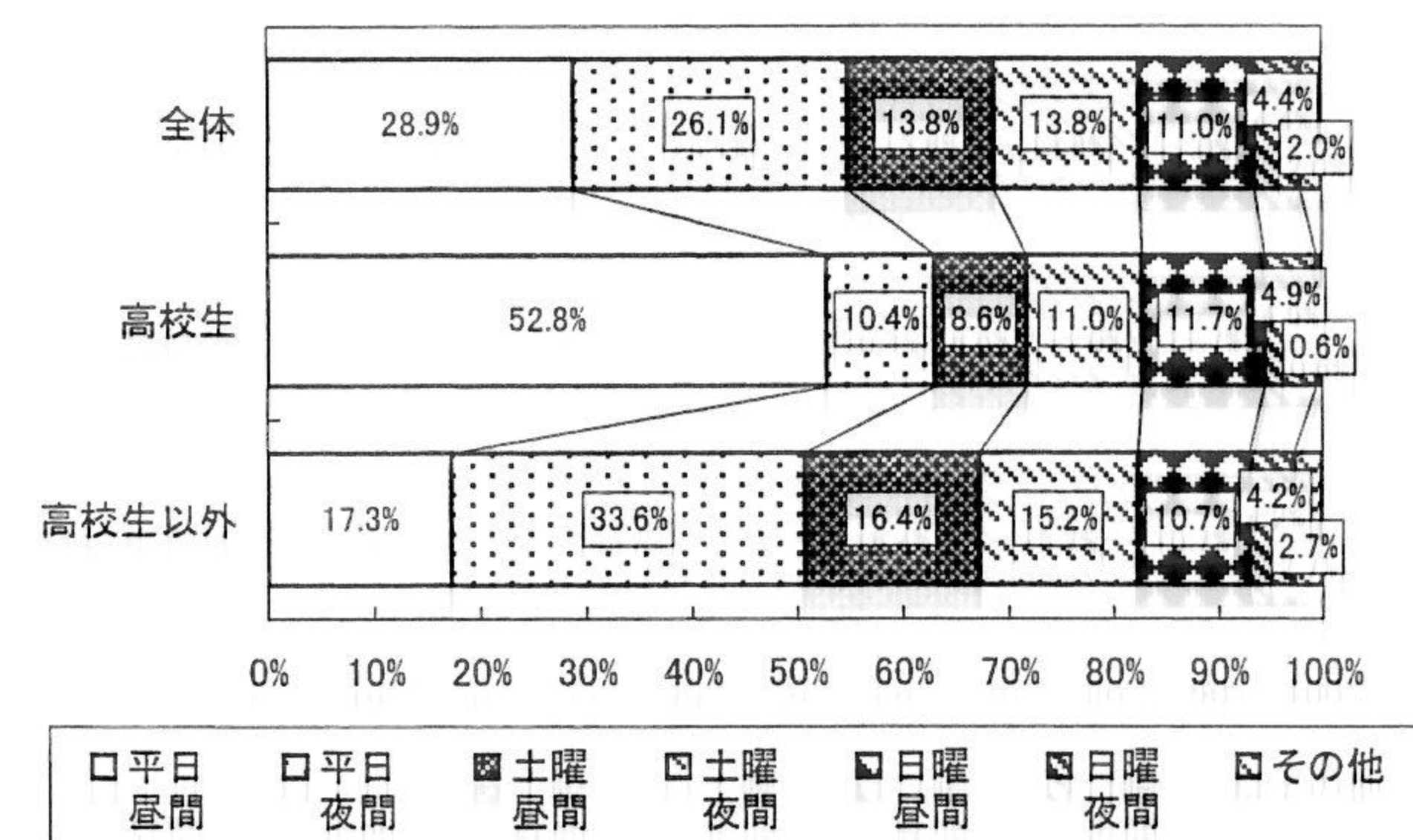


図21 「都合の良い曜日と時間帯」に対する回答（高校生と高校生以外）

平日の昼夜の差を高校生と高校生以外で比べると全く反転しており、高校生以外では、男性が28.2%夜間が昼間より高率であるのに対し、高校生では51.9%昼間が高くなっている。女性は男性ほどは昼夜の差が大きくなく、高校生以外では夜間が10.8%高く、高校生は37.6%昼間が高い。本調査の高校生と高校生以外、女性と男性の回答者数のバランスから、高校生も高校生以外も総合したとき、ひとつ前の段落に記載した結果となるが、その結果のみではここに記載の回答結果が埋もれてしまっている。

土曜日に対する回答では、高校生以外は、男性は夜間が昼間より1.7%高いが、女性は逆に昼間が2.5%高いという結果が得られている。

図25に高校生以外の年代による変化を示す。10代では「平日の昼間」の3.1%以外はほぼ10%から20%程度にまとまっているが、20代、30代、40代と「平日夜間」が最上位を占め、30代では47.5%にも昇る。しかし、50代以上になると「平日昼間」と入れ替わる。60代・70代では、「平日昼間」が67.9%、およそ7割になり、その外の曜日や時間帯が低下している。

「平日昼間」は40代で17.0%に上昇し、50代で31.8

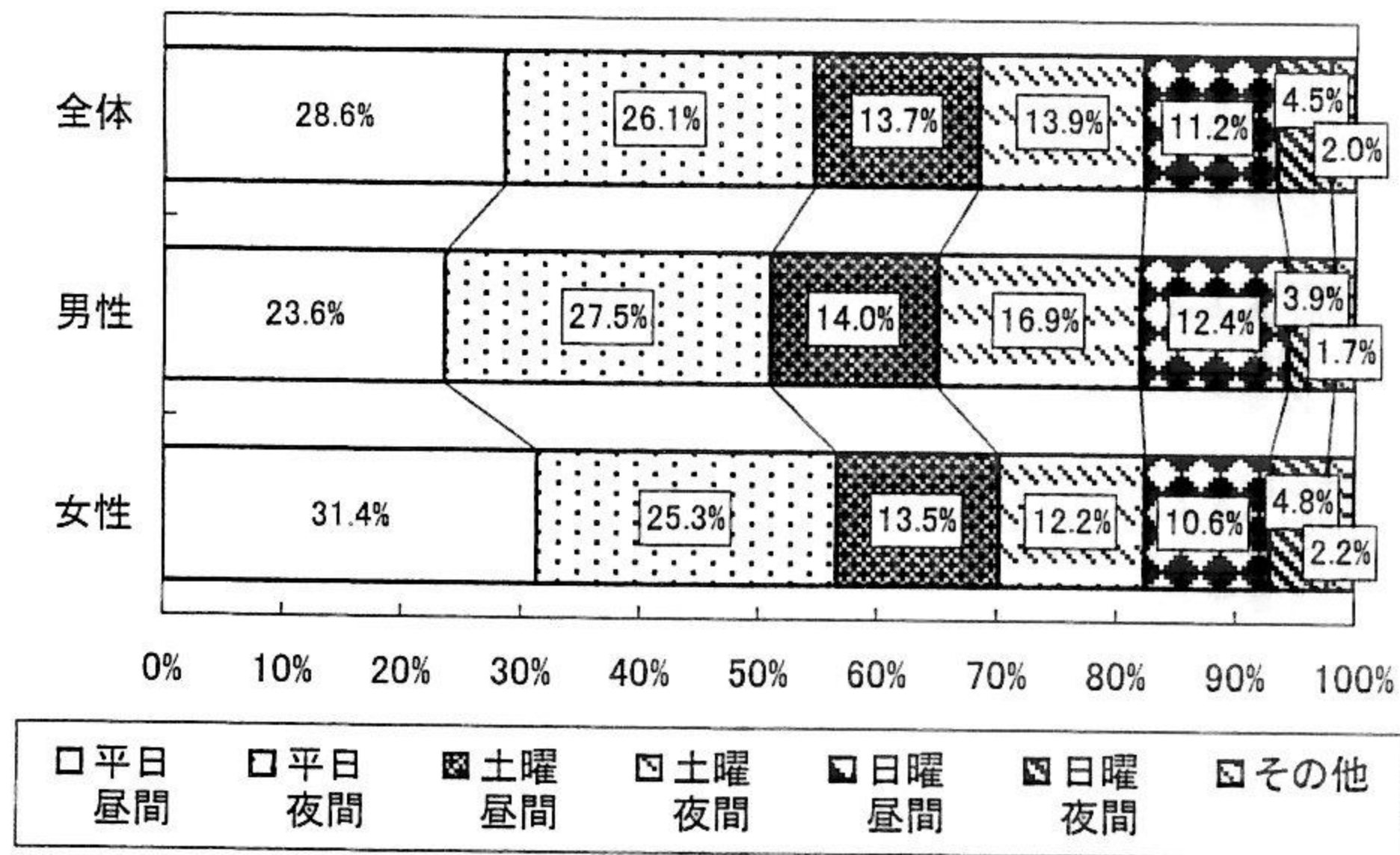


図22 「都合の良い曜日と時間帯」に対する回答（全体・性別）

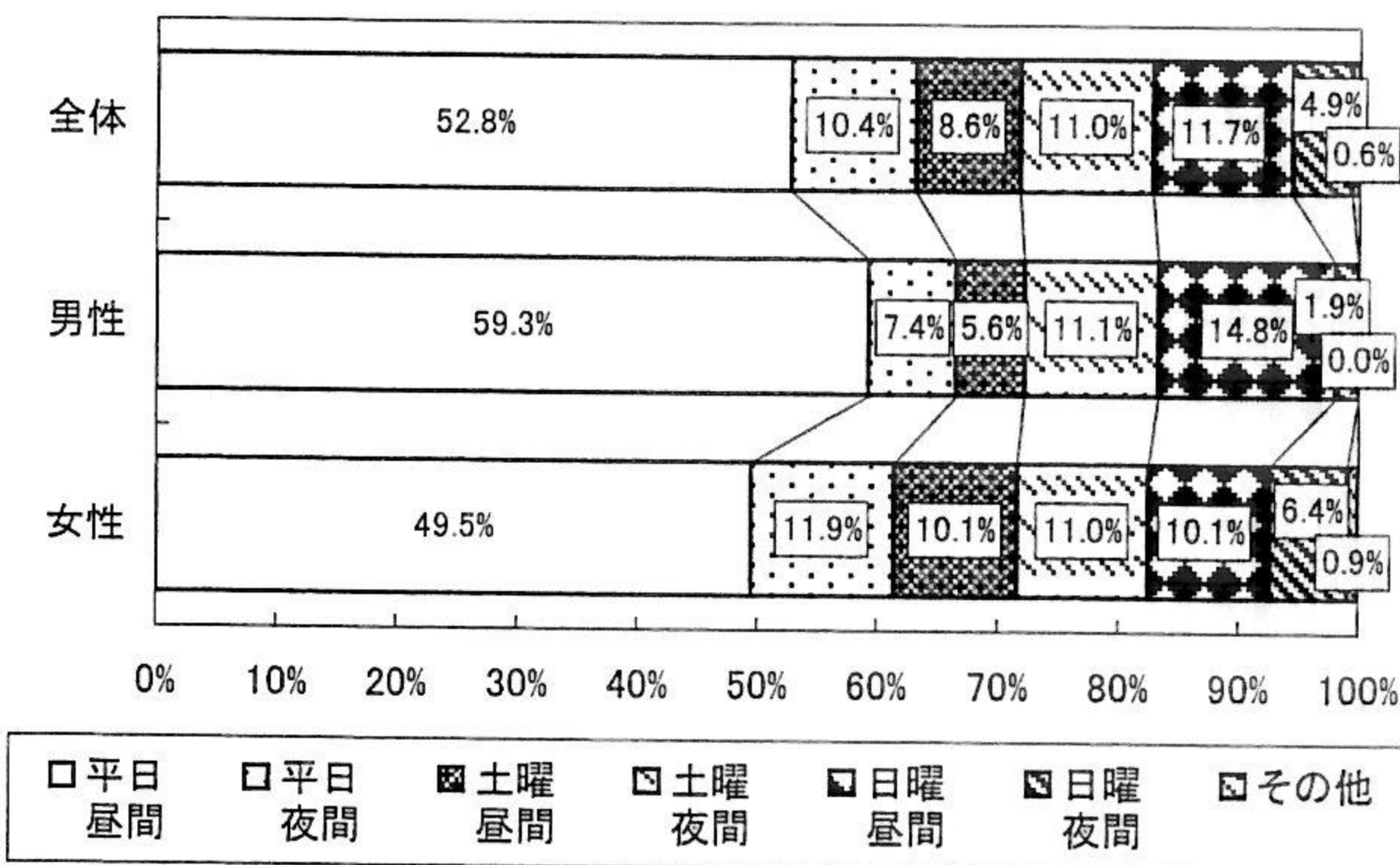


図23 「都合の良い曜日と時間帯」に対する回答（高校生・性別）

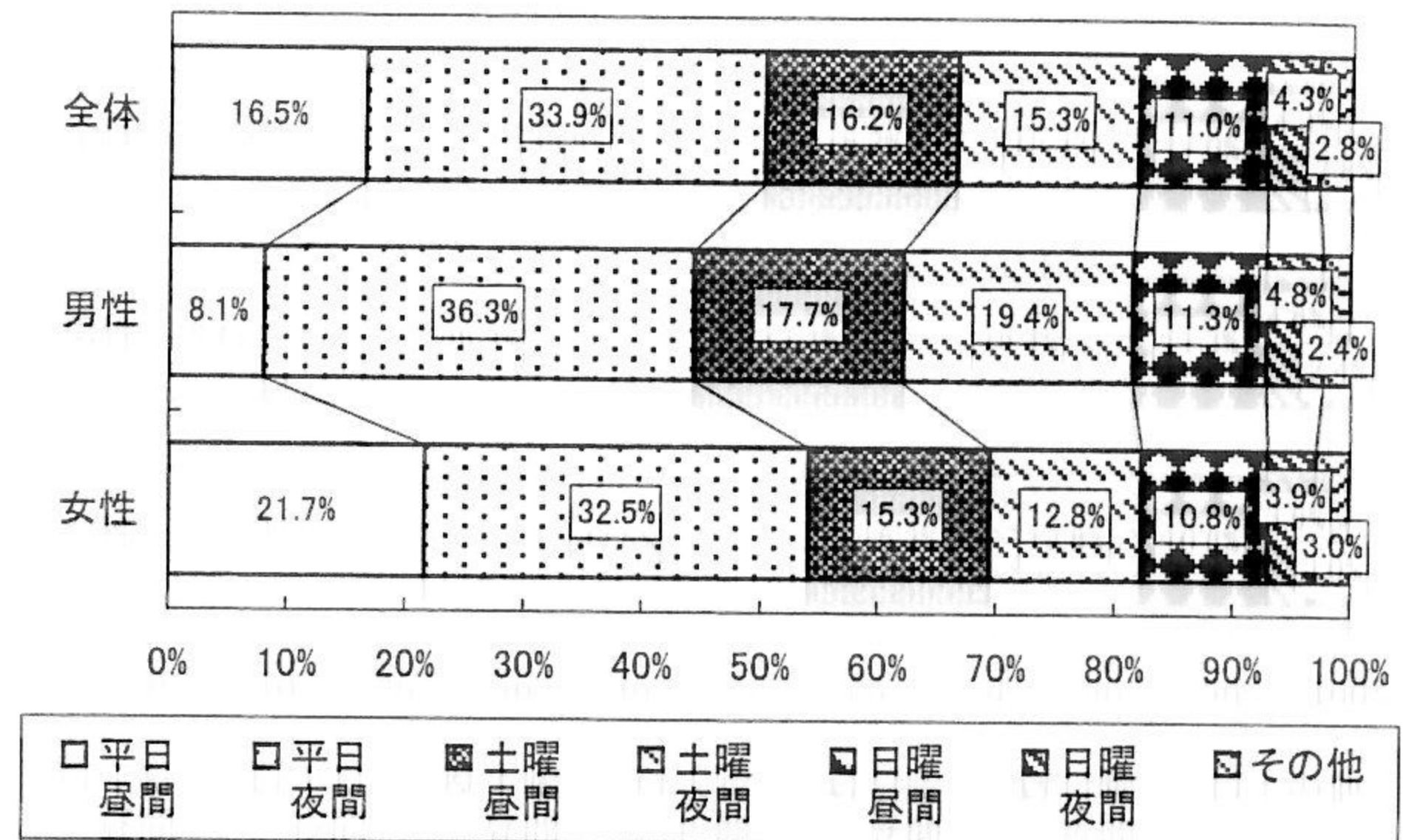


図24 「都合の良い曜日と時間帯」に対する回答（高校生以外・性別）

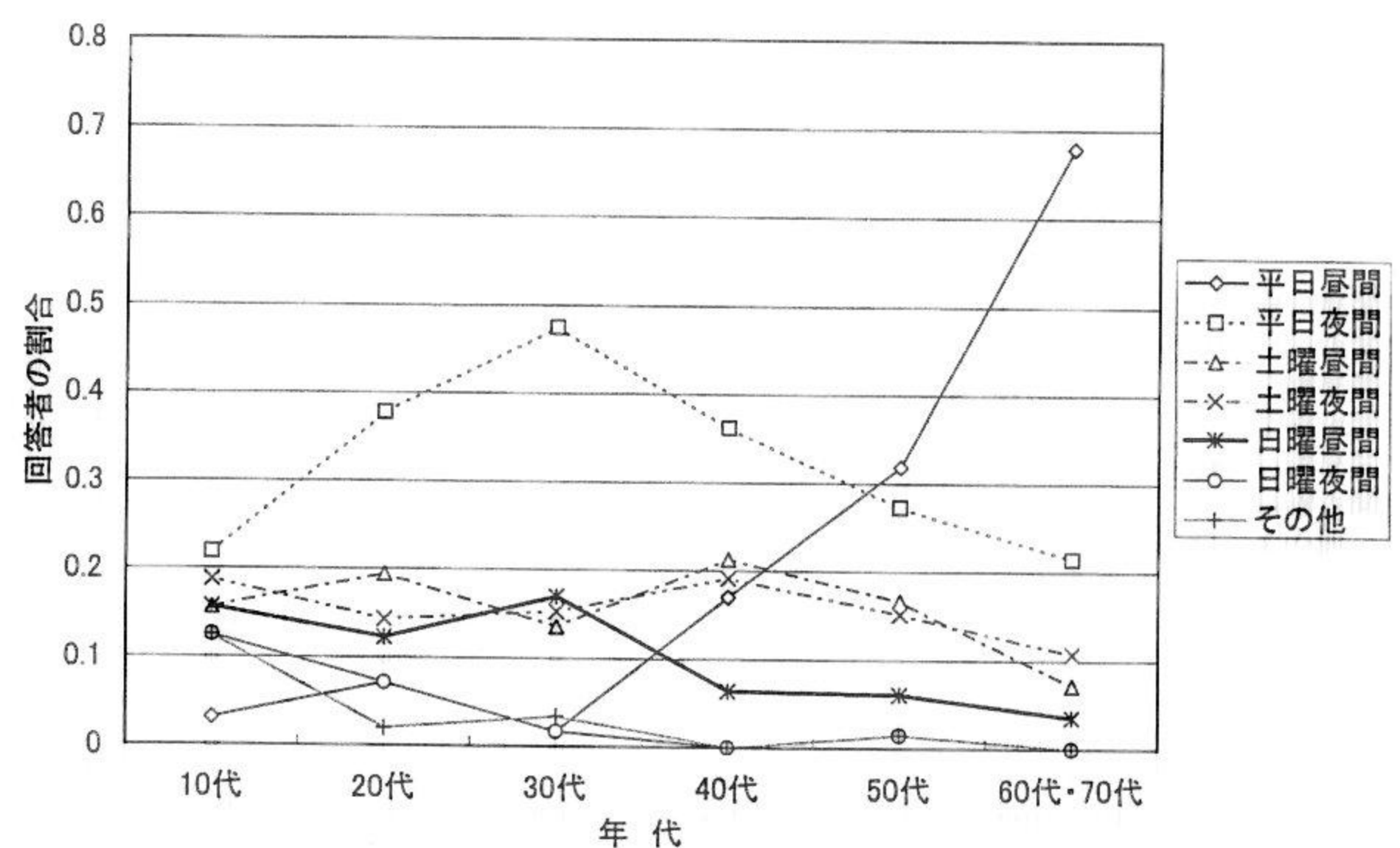


図25 「都合の良い曜日と時間帯」（高校生以外）の年代による変化

%であるが、10代、20代、30代では、それぞれ、3.1%、7.1%、1.7%と低率である。「土曜日の昼夜」と「日曜昼間」は20%より低いが、各年代で変動が少ない。「日曜昼間」は40代からは10%以下に落ちている。

本質問の回答項目「その他」の欄に記載されたことは次の4件である。

「振替日」「特になし」「日～土 7：30～10：00」「平日夜 8 時くらいから」。

3.7 「学ぶことができる期間」に対する回答結果

短期大学での一般的な就学年数 2 年を基準に回答項目を用意した本質問に対する回答結果は、図26に示すように、全体的には「半年」、「2 年以上」、「1 年間」、そして、「2 年間」と順位が付くが、さほど大きな差はない。しかし、高校生と高校生以外で集計すると、高校生は「2 年以上」が37.0%と、もっとも高く、次が「2 年間」で、24.4%である。「半年」と「1 年」は同率で17.0%である。

高校生以外では、「半年」がもっとも高く35.1%である。そして、「1 年間」、「2 年以上」、「2 年間」と続く。

男女差は、図27に示すように全体では、男性は「2 年以上」が38.6%と、最高率であるのに対し、女性は「半年」が最高で32.6%、「2 年以上」は20.6%である。男性は、「半年」と「1 年間」が同率で22.7%である。「2 年間」は、男性は12.1%で第 4 位、女性も18.0%で第 4 位である。

高校生の場合、図28に示すように、男性の「2 年以上」は53.2%と半分以上を占める。女性も「2 年以上」は第 1 位ではあるが28.4%で、2 位の「2 年間」の27.3%と大差ない。高校生以外では、図29に示すように、女性は「半年」が39.3%と高率であり、これに「1 年間」を加えると65%を超える。男性も女性も「その他」を除くと「2 年間」がもっとも低い率を示し、男性は8.2%である。

高校生以外の「学ぶことができる期間」の年代による変化は、図30に示すように、全体的に高い率である「半年」が、10代がもっとも高く40代までは最上位を維持する。しかし、40代からは減少傾向を示し、60代・70代に至っては「2 年以上」や「1 年間」より低くなる。「2 年以上」は年代と共に増加し、50代では最上位

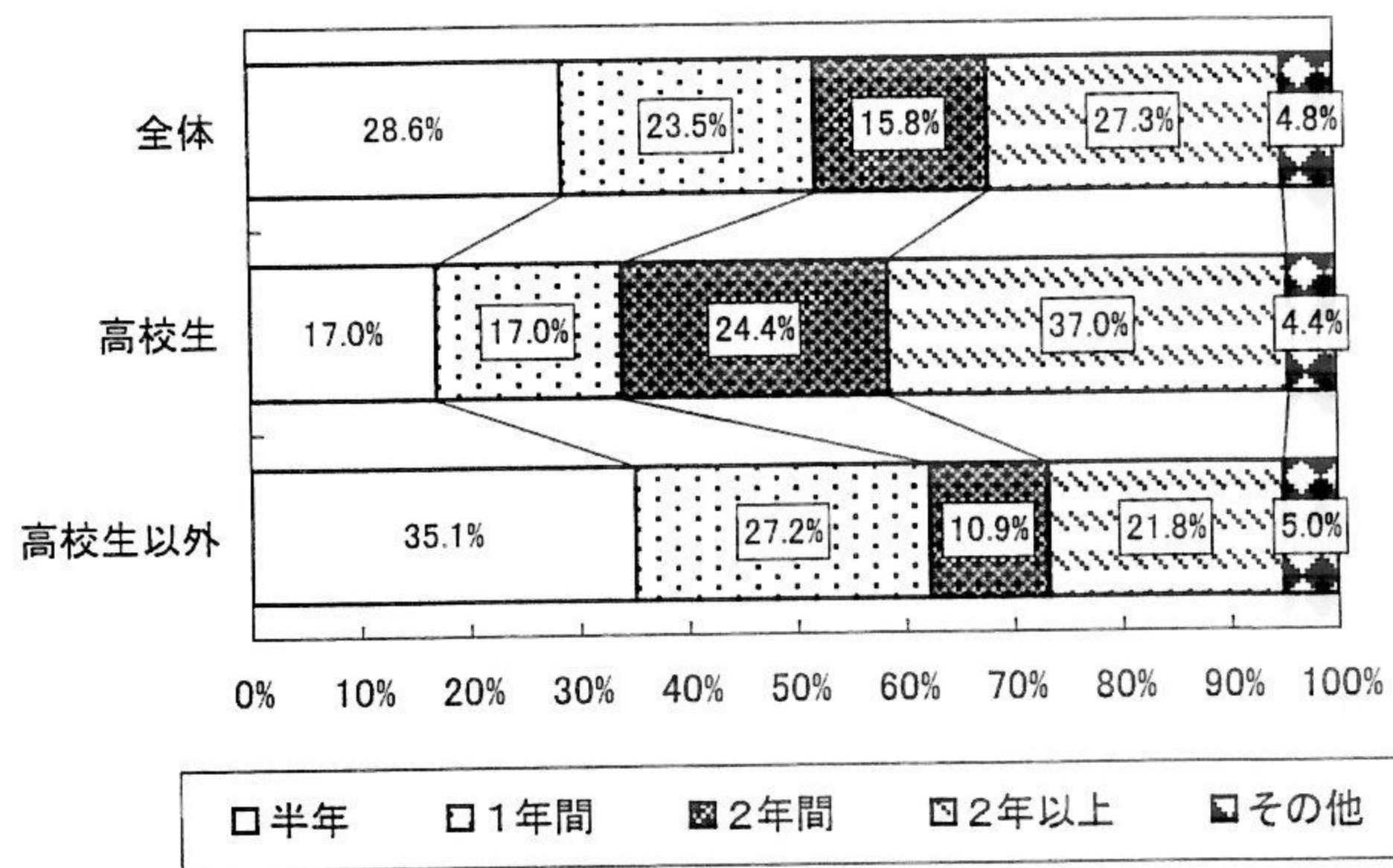


図26 「学ぶことができる期間」に対する回答（高校生と高校生以外）

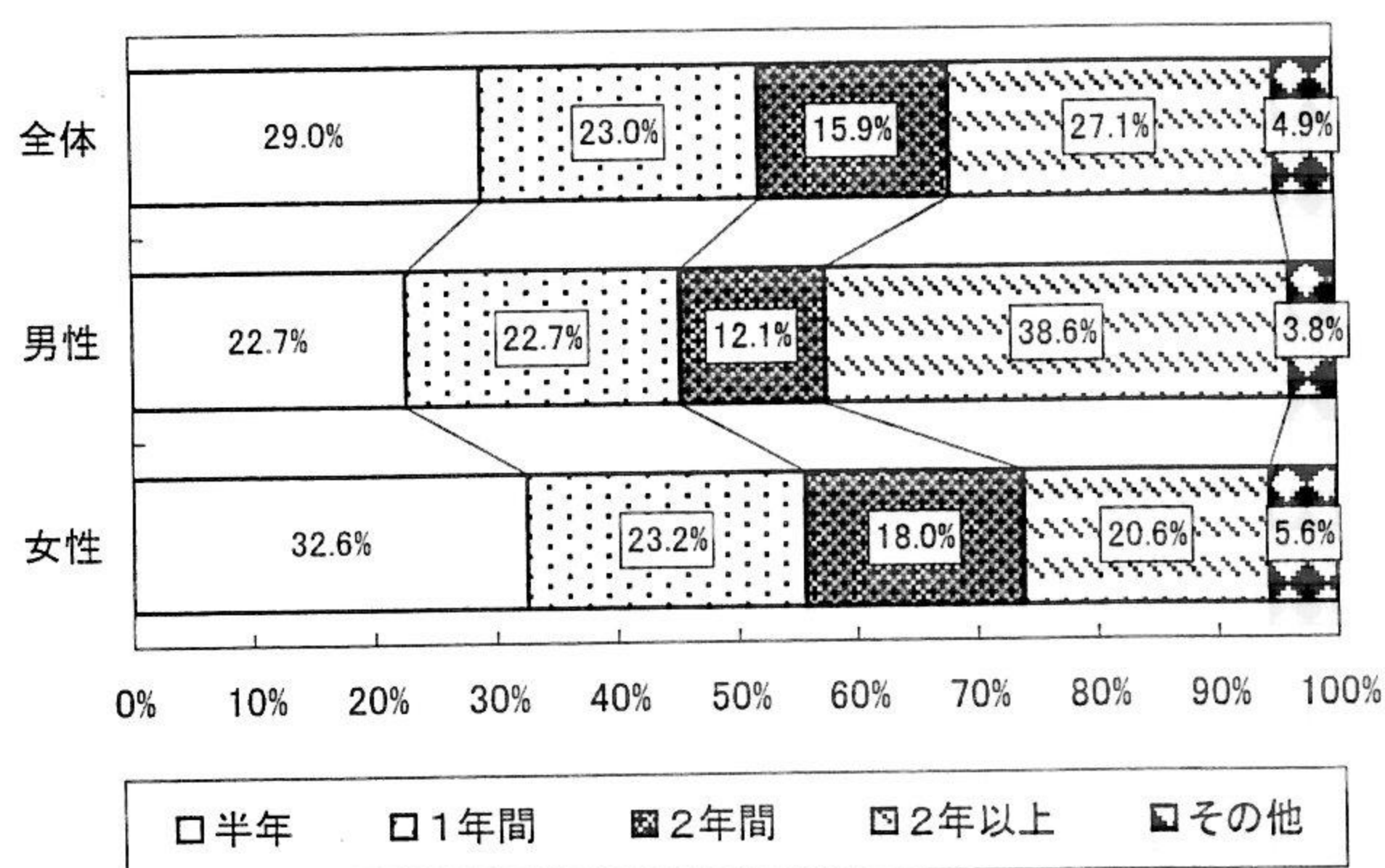


図27 「学ぶことができる期間」に対する回答（全体・性別）

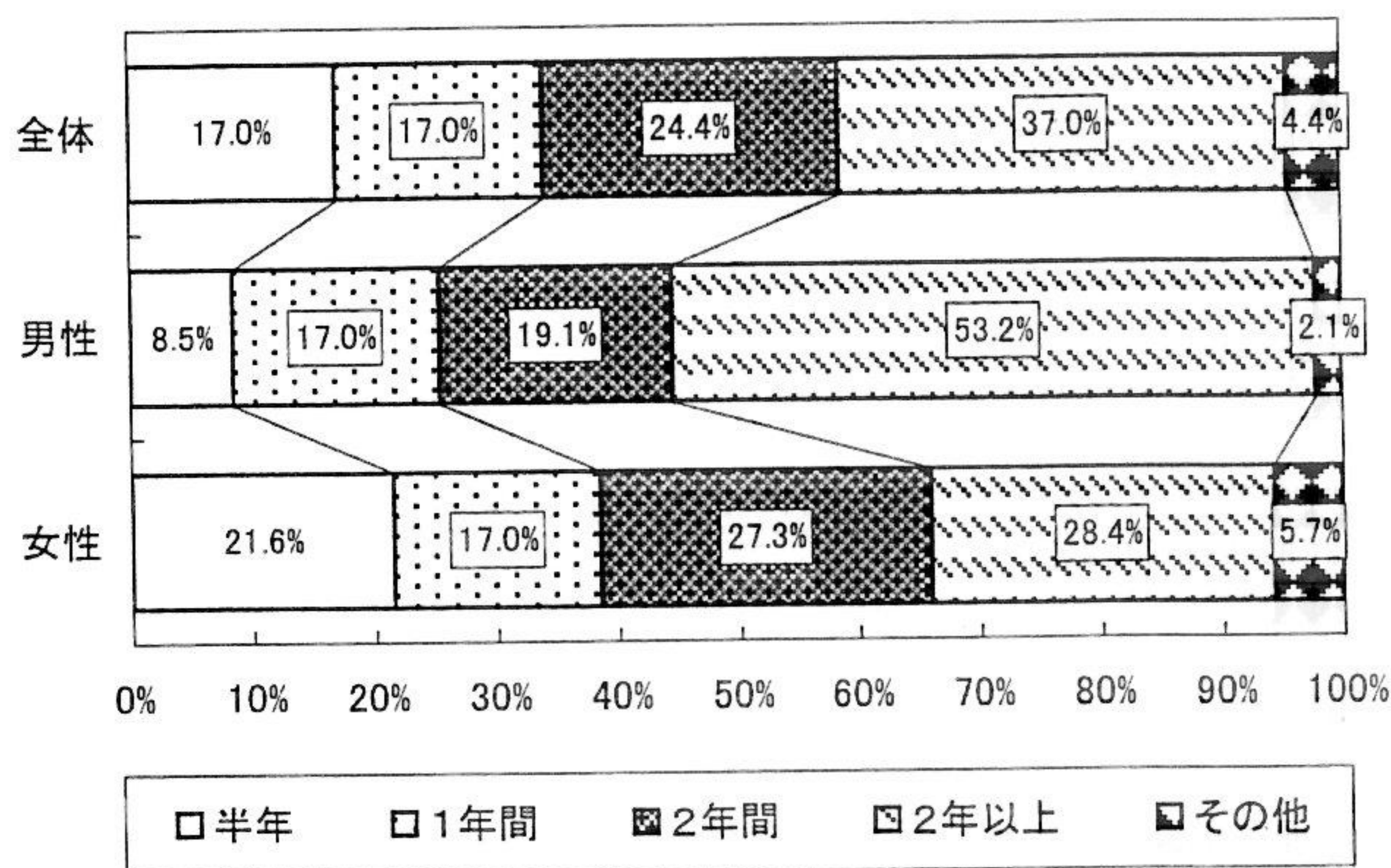


図28 「学ぶことができる期間」に対する回答（高校生・性別）

となるが、60代・70代となるとやや下降している。「1年間」や「2年間」は全年代を通して平均的であるが、「1年間」の方が「2年間」より倍程度上位にある。

本質問の回答項目「その他」の欄に記載された事項は次の7件である。

「1.5年から3年」「2ヶ月」「高校の間」「半年毎」「資格取得できるまで」「期限無し」「週1回6ヶ月」。

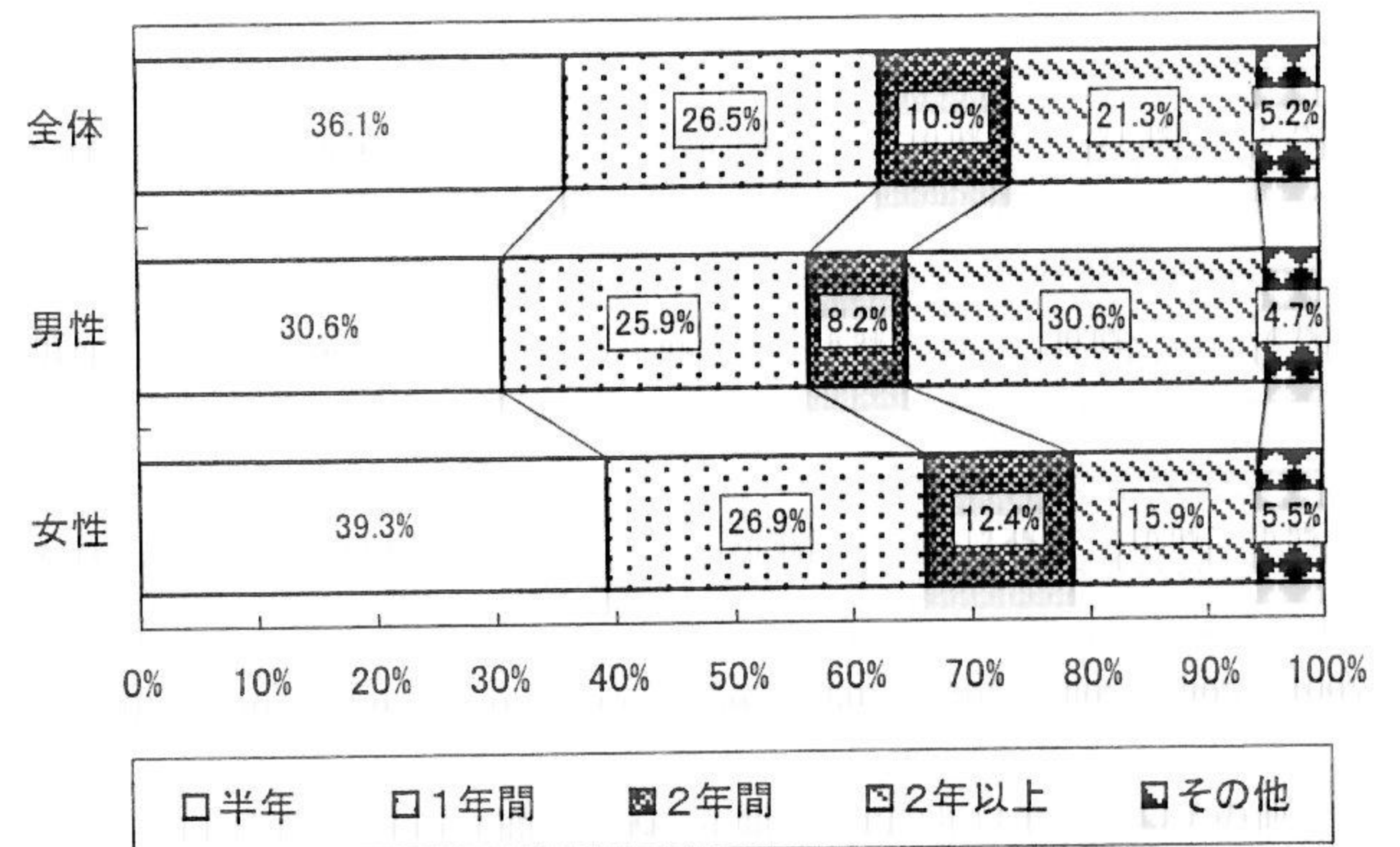


図29 「学ぶことができる期間」に対する回答（高校生以外・性別）

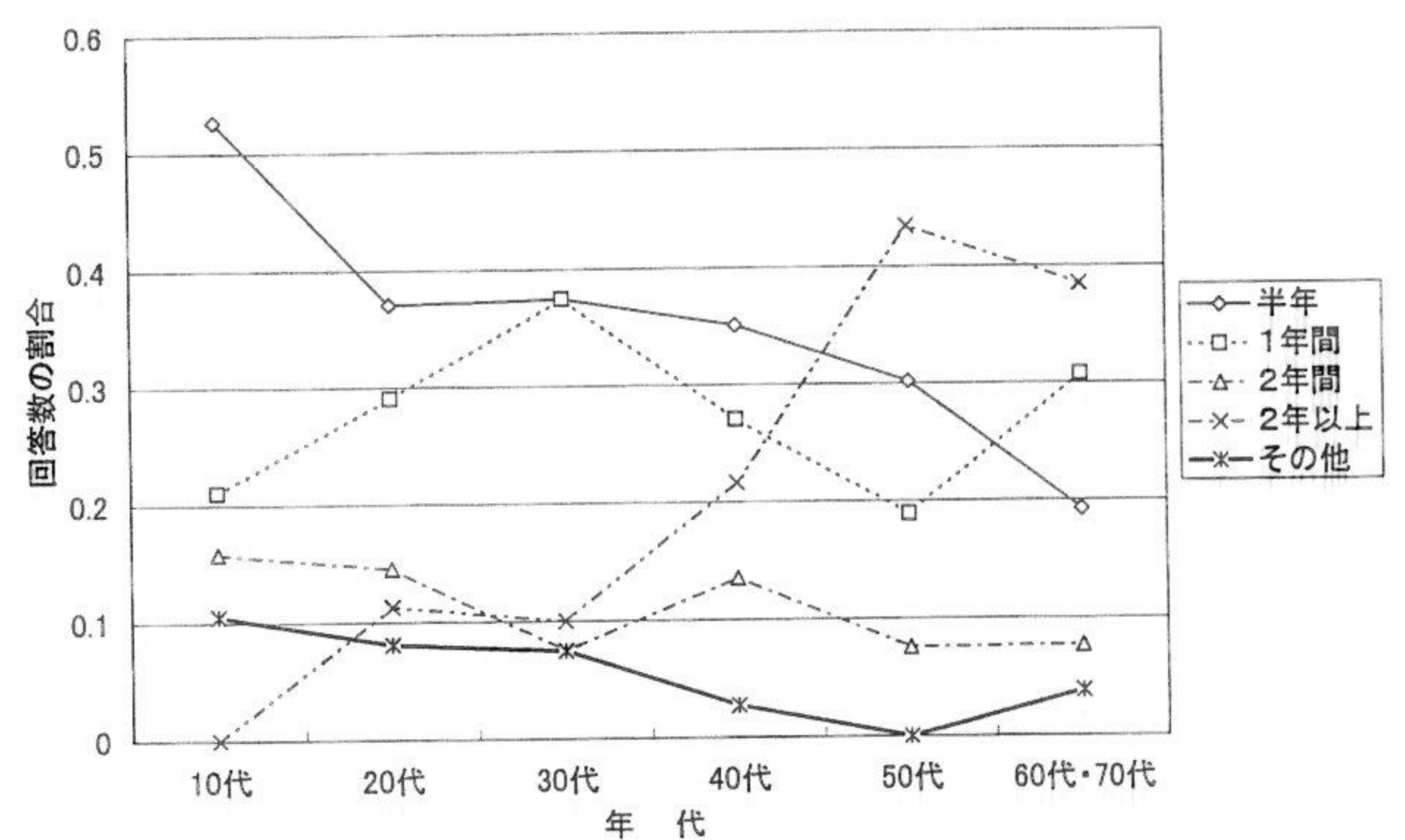


図30 「学ぶことができる期間」（高校生以外）の年代による変化

3.8 「学びたい内容」に対する回答結果（複数回答を可とする）

「学びたい内容」については、基本的に、自由に記述できる欄を設けて問い、その後他の質問と同様にいくつかの回答項目を準備した質問を付け加えた形式のものとした。準備した回答項目は、「情報システム」と「言語文化」に関する内容の中から、本アンケート調査実施機関が現在、あるいは将来、教育課程の一部とすることができるか、また、講座開設の可能性のある範囲から選定し掲げた。回答は複数の回答を可とした。

自由記述欄には表6に示すような多くの回答が寄せられた。アンケート実施者が準備した「情報システム」「言語文化」に関する回答結果についても同表に示すとおりであり、高校生と高校生以外に分類した表やグラフを割愛するが、両者に似かよった傾向が観られる。高校生以外では「英語（会話力）」が最も高く、「インターネット利用技術」「コンピュータ利用技術」がそれに続く。高校生も「情報処理技術」「コンピュータグラフィックスやマルチメディア」と並んで「英語」に対

表6 「学びたい内容」に対する回答

学びたい内容	女性	男性	空白	10代	20代	30代	40代	50代	60代 70代	空白	計
情報処理技術	48	28	3	41	10	12	6	6	4	0	79
プログラミング	13	21	1	14	9	1	5	5	1	0	35
システム構築技術	3	13	0	7	3	4	1	0	1	0	16
コンピュータ	37	21	2	30	6	8	10	4	2	0	60
コンピュータ利用技術	43	32	2	24	8	16	9	11	8	1	77
インターネット利用技術	44	38	2	24	13	13	8	16	10	0	84
ウェブデザイン	16	8	0	8	11	3	2	0	0	0	24
コンピュータグラフィックスやマルチメディア	47	25	1	37	13	5	5	10	3	0	73
医療情報処理	35	11	0	25	11	5	2	2	1	0	46
観光情報処理	12	4	0	7	4	1	1	3	0	0	16
英語（読解力）	41	20	0	32	10	5	6	3	5	0	61
英語（会話力）	78	40	2	39	19	15	15	22	10	0	120
図書館情報学	13	4	0	10	2	2	0	3	0	0	17
国際文化	39	19	3	22	4	2	4	20	9	0	61
合計	469	284	16	320	123	92	74	105	54	1	769
自由記述欄に記載された回答	興味あること、文学・書道、古典文学・美術分野の技法、文学的なこと、日本文学・日本語教員養成、語学、外国語（2名）、日本美術・伝統工芸・芸能、法学、法律、法について学びたい、経済・民法・憲法、経営・プレゼンのノウハウ、経営コンサルタント・経済、福祉、福祉・歴史など、社会福祉、社会福祉関係、生徒指導、生物学（2名）、理数に関すること、検定試験について、資格を持つことで就職に有利なもの、栄養・調理資格・美美容資格・ネイルアート資格、司法書士資格、保育士、医療技術、服飾関係、美容関係、トリマー、車、栄養と料理、栄養学・心理学、工学、コンピュータ関係、工業系、コンピュータ・英語、ネットワーク関連、パソコンCAD、情報処理										

する関心が高い。2003年4月、愛知県において大学や短期大学で実施された「大学における英語の授業に望むこと」に対するアンケート調査では、「会話」や「実用的に使える英語」に対する回答が45%で、他のタイプの授業を大きくリードしている結果が報告されている⁵⁾。

また、ここまでの年代による変化の検討では高校生以外を対象としたが、この「学びたい内容」の集計においては、高校生も10代の中に加えている。その結果、回答者数の多い10代が全体的に高い数値を示しており、グラフ化するとそれぞれの年代がほぼ同様の傾向を示していることが分かる。しかし50代は「英語（会話）」、「国際文化」「インターネット利用技術」などの希望が高く、特徴的な傾向を示している。60代・70代にも同様の傾向が観られる。

3.9 「取得したい資格・検定」に対する回答結果（複数回答を可とする）

「取得したい資格・検定」についても「学びたい内容」と同様に自由記述を基本とし、いくつかの回答項目を準備した質問を付け加えた形式のものとした。自由記述欄には表7に示す30の記載があった。アンケート実施者が提示した「情報システム」や、「英語」「日本語」に対する能力を評定する資格・検定に関する回答結果も同表に示す。表6と同様に高校生は10代の中に含まれており、10代では「英検」、「ワープロ検定」、そして「情報処理士」に票が集まっている。高校生以外では、「TOEIC」、「英検」、「日本語能力試験」など言語能力に関わる資格に関心が高く、「情報処理士」や「表計算・ワープロ検定」「簿記検定」などがその後について高くなっている。しかし、資格や検定に関するこの回答は、資格名、検定名が一般的で広く知られているもの、また、「上級情報処理士」よりは「情報処理士」が高いことから伺えるが、手の届きそうな資格や検定に多くの回答が寄せられているように思われる。

医療事務関係の資格、「表計算検定」などコンピュー

表7 「取得したい資格・検定」に対する回答

取得したい資格	女性	男性	空白	10代	20代	30代	40代	50代	60代 70代	空白	計
上級情報処理士	11	11	0	14	5	2	1	0	0	0	22
情報処理士	28	23	0	32	3	6	4	3	3	0	51
ビジネス実務士	7	11	1	7	3	1	1	5	2	0	19
医療管理秘書士	20	3	0	11	8	2	2	0	0	0	23
医事管理士	16	5	0	11	6	2	0	2	0	0	21
病歴記録管理士	11	1	0	7	3	0	0	1	1	0	12
国内旅行取扱主任者試験	11	4	0	8	3	2	1	0	1	0	15
ワープロ検定	36	15	3	38	5	5	2	3	1	0	54
表計算検定	19	5	2	11	2	8	3	1	1	0	26
データベース検定	11	6	0	8	5	1	3	0	0	0	17
情報検索基礎能力検定	10	4	1	12	0	1	2	0	0	0	15
システムアドミニストレータ	6	10	1	5	6	3	2	1	0	0	17
簿記検定	23	9	0	17	8	5	0	2	0	0	32
CG 検定	10	10	0	10	7	2	0	1	0	0	20
マルチメディア検定	6	9	0	9	4	1	0	1	0	0	15
英検	40	28	0	44	9	4	6	2	3	0	68
TOEIC	30	23	0	21	11	9	6	5	1	0	53
日本語能力試験	26	8	0	12	6	4	3	7	1	1	34
図書館司書資格	11	10	0	15	2	2	0	2	0	0	21
合計	332	195	8	292	96	60	36	36	14	1	535
自由記述欄に記載された回答	英語、国連英検・フランス語検定、実用英検1級、漢字検定、漢検、数検、教員免許(2名)、日本語教員、書道・教師、司法書士、司法・行政書士、社会保険労務士、税理士、全商など、社会福祉士、社会福祉、精神保健福祉士、医療関係、作業療法士、情報処理(2名)、コンピュータ技術・情報処理、データベース関連、MOT・MOUS・SE(国資)、MOUS 検定(2人)、パソコン、パソコン検定、着付け等、トリマー、生涯勉強として知識を得たい、いろいろ										

タの利用技術に関する資格、「国内旅行取扱主任者試験」、あるいは「日本語能力試験」などは回答の多くを女性の回答が占めている。

年代毎の回答を観ると、10代の回答結果に、3つの山があるのが特徴的なところである。その3つは、「情報処理士」「ワープロ検定」、そして「英検」である。

4. おわりに

回答結果を集計してまず判明したことは、本アンケート調査が必ずしも回答しやすい質問構成になっていなかったにもかかわらず、非常に真剣に回答されているということであった。自由記載欄への記載と選択肢からの集計結果のいずれからその真剣さが伝わってきたことを最初に述べさせていただく。

本アンケートは最初の3つの質問で回答者の属性を問い、質問4で「学ぶ機会があれば学びたいと思われ

ますか」というアンケートの基本となる質問をしている。質問の5では、「学びたいと思わない」と答えた回答者のみにその理由を聞く質問としており、質問6から最終質問までは「思う」と答えた回答者に対し学びたい内容や学ぶ方法などを質問する構成になっている。しかし、「学びたいと思う」と答えた人以外の回答者に対しても、「可能であれば質問6からの質問に答えてほしい」と依頼した。その結果、質問4に対し、「わからない」と「空白」の回答者の50%以上から質問6以降の質問に対しても回答が得られている。「学びたいと思わない」と回答した80名の回答者の内からも、27(33.8%)の回答が得られている。「学びたいと思う」と回答した以外の204名の回答者で観ると、およそ半数の94名(46.1%)の回答者が質問6以降の質問に回答している。

職業に関する回答結果は、今回の集計では当質問以

外の質問の集計には活かしていない。他の質問についても複数の質問項目にわたる集計や分析を後に残している。しかし、この度の各質問単位の集計結果だけでも「学ぶこと」に対する人々の意識を浮かび上がらせることができた。

「もし、誰もがいつでも学ぶことができる場があれば学びたいと思われますか」という質問に対し、「学びたい」と答えた人は高校生以外では70%以上であり、その内でも50代がもっとも高く77%に達することが分かった。参考資料2の平成13年度に宮古市で実施された調査では、「生涯学習をしてみたいと思いますか」という質問に対し、当市では66.0%が、岩手県では71.2%が「してみたいと思う」と回答されており、筆者らの調査結果もこの調査に近い結果となっている。また、このもっとも基本的な質問に対しては女性と男性の回答差が他の質問に比較して非常に小さかったということも特筆することができる。宮古市の調査では女性が69.7%、男性が61.4%と8.3%の差が報告されている。

「学びたい内容」と「取得したい資格・検定」の自由記載欄へ多くの記載があり、それに対する意識を知ることができた。「取得したい資格・検定」においては、10代の回答結果に「情報処理士」「ワープロ検定」「英検」に3つの山があった。これが1人の回答者の結果であるわけではないが、昔から言われてきた「読み書き算盤」に対する人々の認識が回答に反映されたのではないかと考えられた。また、子どもは保護者の考え⁶⁾以上に「生きる力」が何かを感じ取っているのかもしれない。「学びたい内容」においては、50代の回答に、

「英語（会話）」、「国際文化」「インターネット利用技術」などへの要求が高く、60代・70代にも同様の傾向が観られたことは、10代に現れた3つの山もそうであるが、「学習者は、今まで学ぶ機会がなかったのだから学べるだけでいいという段階から、学んだことを生かしたいという期待を持つように変化していく」¹⁾ことの現われであり、これまでの日本の教育を反映した回答でもある。

終わりに、本アンケートにご回答を寄せていただいた皆様に深くお礼を申し上げます。

文献および資料

- 1) 中澤潤, 谷村寛, 大塚雄作, 下中順子, 二宮克美: 研究委員会企画シンポジウム3 生涯学習社会と教育心理学, 『教育心理学年報』日本教育心理学会, pp17-20, Vol.37, 1997.
- 2) 宮古市教育委員会: 平成13年度 宮古市生涯学習意識調査報告書, 2002.
調査報告書はホームページから入手 (宮古市市役所 URL <http://www.city.miyako.iwate.jp/>)
- 3) 個人情報保護法を制定, 『時の動き』内閣府, pp2-9, July, 2003.
- 4) 大学における教育内容の改革状況について, 『大学資料』, p52, No.163, 2004.
- 5) 高橋妙子: 学生たちは授業に何を期待しているかーアンケート調査から, 『英語教育』大修館書店, pp28-29, Vol.53, No.4, July, 2004.
- 6) 由布佐和子: 保護者の期待の「本音」, 『教育と医学』慶應義塾大学出版会, pp46-55, No.605, 2003.